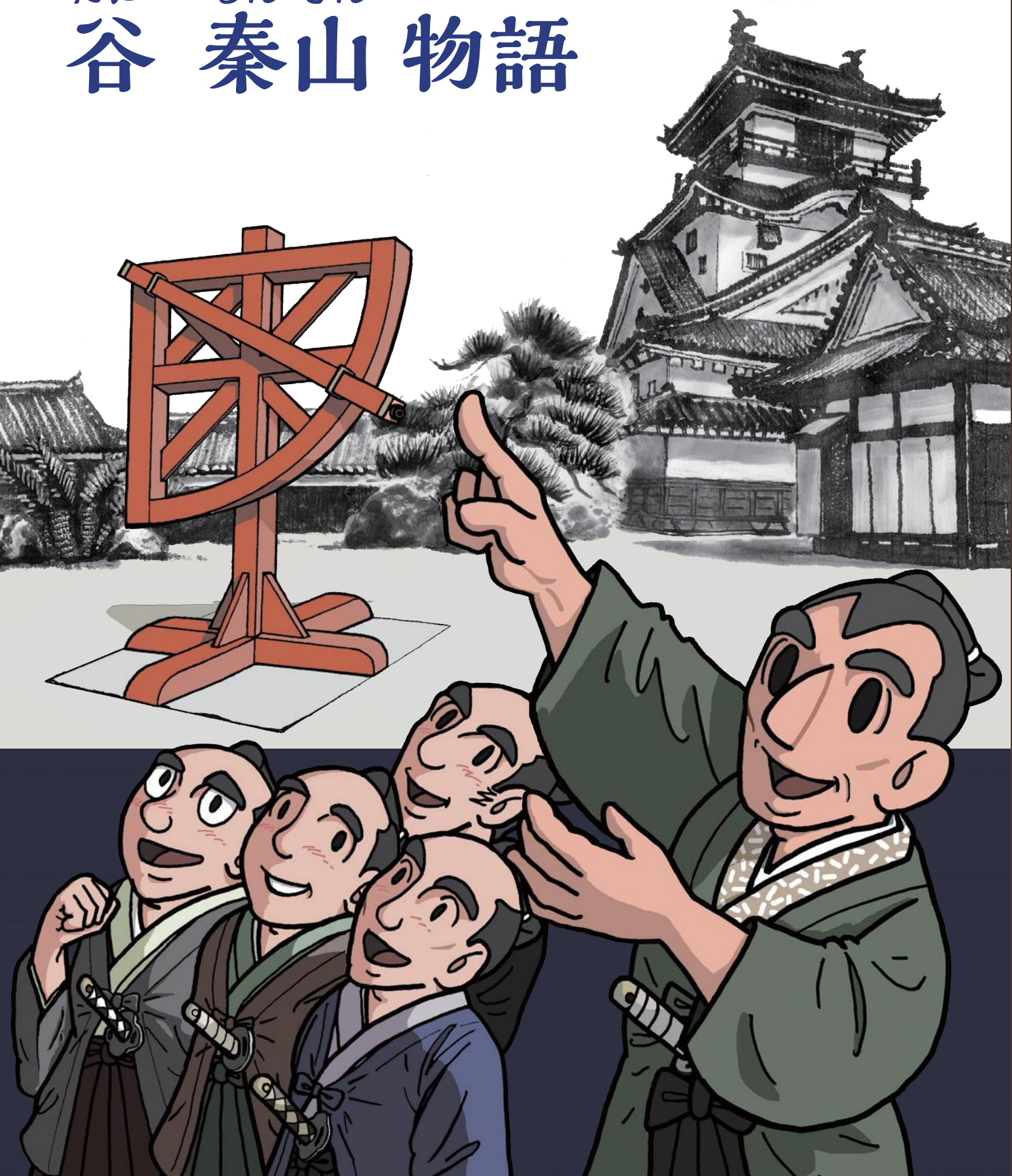


たに じん ざん
谷 秦山 物語



はっかん 発刊に寄せて

皆さんは「学問」^{がくもん}と聞くと、どんなことを思い浮かべますか？学校^{がっこう}で勉強^{べんきょう}すること、試験^{しけん}のために覚えること、大人になって役立つ知識を身につけること——いろいろなイメージがあるでしょう。

でも、谷秦山先生^{たにじんざん}が目指した「学問」は、もっと広く深いものでした。それは、ただ知識^{ちしき}を増やすことではなく、「なぜだろう？」と考え続けること。世の中の仕組み^{しき}や自然^{しぜん}の不思議^{ふしぎ}、そして人間としてどう生きるべきかを探ることでした。

秦山先生はどんな困難^{こんなん}にあっても、学ぶことをやめませんでした。藩内^{はんない}の争いや無実^{むじつ}の罪^{つみ}で長い蟄居^{ちつきよ}生活を送ることになっても、心を強く持ち、学び続けました。そして、その精神^{せいしん}は後^{のち}に多くの若者^{わかもの}に受け継^つがれ、日本を変える力となりました。

私たち高知県秦山会^{こうちけんじんざんかい}では、この偉大^{いだい}な谷秦山先生^{こうせき たた こうせい}の功績^{こうせき}を称え、後世^{こうせい}へと伝える活動^{くわつ}を続けています。秦山先生は、南学^{なんがく}の発展^{はつてん}を通じて坂本龍馬^{さかもとりょうま}や岩崎弥太郎^{いわさきや たろう}といった多くの志士^{し し}たちに影響^{えいきょう}を与えました。毎年2月の第2日曜日^{にち}には墓前祭^{ぼぜんさい}を開催^{かいさい}し、県内外^{けんないがい}から多くの人々^{つど}が集^あいます。また、今日^{こんにち}では谷秦山先生^{こうせき}は学問^{がくもん}の神様^{かみさま}としても知られ、受験生^{じゅけんせい}たちが合格祈願^{ごうかくきがん}に訪^{おも}れる場所^{ばしょ}としても親^{した}しまれています。

この本は、次世代^{じせだい}を担^{にな}う子どもたちに谷秦山先生^{しょうがい}の生涯^{じょうねつ}や学問^{がくもん}への情熱^{じょうねつ}を知ってもらいたいという思い^{さくせい}で作成^{さくせい}しました。秦山先生^{じんせい}の人生^{じんせい}を通して、皆さんも「何のために学ぶのか」を考えるきっかけ^とを持ってほしいと思います。

谷秦山先生は、私たちにこう問いかけているように思います。

「あなたが立ち止まり、考えるべき『なぜだろう？』は何ですか？」

秦山先生の生き方は、学ぶことの本当^{いみ}の意味^{いみ}を教えてください。そしてその灯^{とも}は、これからも消えることなく未来^{みらい}を照^てらし続けるでしょう。高知県秦山会^{こうちけんじんざんかい}は、これからも秦山先生の精神^{せいしん}を受け継^つぎ、伝^{つた}えていくことをお約束^{やくそく}します。

子どもたち一人ひとりが、秦山先生^{じんせい}のように自分自身^{じぶんじしん}の問いを大切にし、学^{まな}ぶ喜び^{よろこび}を見つけてくれることを願^{ねが}っています。

2026 年 2 月 高知県秦山会

たにじんさんものがたり

『谷秦山物語』を読まれる前に

- 一、文中の年齢は、すべて「数え年」です。
- 二、年は、和暦（西暦）年の順に載せています。
- 三、秦山が暮らした江戸時代の年月日は漢数字で（西暦は英数字）、太陽暦が使われるようになった明治6（1873）年以降の年月日は英数字に、区別して載せています。



目次

『谷秦山物語』

たにじんさんものがたり

星の名前にもなった

谷秦山 を知っちゃう？ 2

丹三郎、おまんは天才じゃ！ 4

エピソード① 素晴らしい記憶力 5

山崎闇斎先生、おしえてつかあさい！ 6

エピソード② 初めての彗星観測 8

秦山は、ハレー彗星を見ちやらの？ 10

号を「秦山」とするぜよ 11

第二の師、浅見綱斎との出会いと別れ 12

エピソード③ 驚き！突然の綱斎との再会 12

ちよっこり、宿毛へ行くき 14

エピソード④ 秦山二十四歳幡多地方への旅 15

兼山先生の子どもたちと 16

手紙をやりとりしりました 16

エピソード⑤ 長く続いた婉との交流 17

渋川春海先生に観測が 18

大切じゃと教わりました 18

エピソード⑥ 大火事の後に、しし座流星群 20

高知城の北緯は、三十三度半強じゃ！ 22

エピソード⑦ さうなる高みを目指しちゆうきに！ 24

米を持ち寄ろう、秦山先生のために！ 26

新しい生活がはじまつたぜよ 27

エピソード⑧ わしは鏡野が大好きじゃ！ 28

やっと、渋川先生にお会いできました 30

エピソード⑨ 秦山が学んだ天文暦学 32

わしが何をしたいうんじゃ 33

エピソード⑩ 塾居生活は、 34

「死んでゆくのかしらん・・・」 36

わしがやってきたことが、 38

役に立ちよるか・・・？ 38

探求 は、まっことおもしろいきに！ 40

読者へのメッセージ 42



谷^{たに} 秦^{じん} 山^{ざん} 物^{もの} 語^{がたり}



◆表紙 イラスト

秦山は、高知城の緯度を見つけるために、忍耐強い天体観測を三年行い、元禄七（1694）年に「三十三度半強」であることを決定しました。イラストは、そのことを秦山が若い弟子たちに話しているイメージで描きました。観測に使用した『象限儀（しょうげんぎ）』を入れています。

◆裏表紙 イラスト

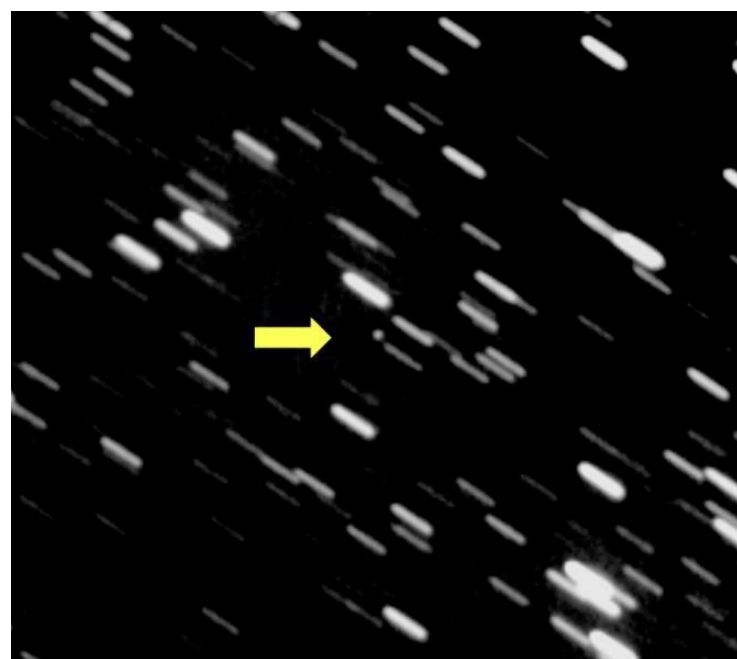
秦山は、江戸の渋川春海の弟子になり、十年間、手紙での通信教育で学びます。念願かない、元禄十七（1704）年、藩主のゆるしがでて、江戸へ行き春海から直接教えを受けることになります。イラストは、土佐を出発したときの身なり（想像図）と、四国内の足跡を記した地図です。

星の名前にもなった “谷秦山”を知っちゅう？

宇宙にはたくさん星がありますが、その中に香美市の偉人“谷秦山”という名前の星があることを知っていますか。太陽系の火星と木星の間にある小惑星帯の星のひとつです。この小惑星は、とても暗くて肉眼では直接見ることはできませんが、確かに存在する星です。

高知市に住む世界的なコメット・ハンター、関勉さんが平成5（1993）年に芸西天文学習館の60センチメートル望遠鏡を使って発見した小惑星（番号43857）で、令和3（2021）年に国際天文学連合（IAU）小惑星センターから“Tanijinzan”＝谷秦山”と命名したことが発表されました。

星の名前にもなり、今なお「学問の神様」と慕われ、香美市土佐山田町ぐいみ谷にある墓地には、多くの人が合格祈願などで参拝に訪れています。江戸時代の天文学の研究でも、欠くことのできない人物といわれています。



小惑星「谷秦山」
Tanijinzan、1993 VP2、43857
(2021年12月5日佐藤裕久さん撮影)

ます。そんな“谷秦山”とは、どんな人物なのでしょう。お墓の近くには、秦山公園や秦山町がありますが、どんなゆかりがあるでしょう。

令和から平成、昭和、大正、明治、江戸と、三百年以上、時代をさかのぼって会いに行ってみましょう。

舞台は江戸時代のはじめのころです。



丹三郎、おまんは天才じゃ！

谷秦山は、寛文三（1663）年三月十一日、長岡郡岡豊八幡村（現在の南州市岡豊八幡）で、谷神兵衛重元の三男として誕生し、本名 谷重遠、通称は 丹三郎、幼名（幼いときの名前）を小三次と名付けられました。

谷家は代々神官職で、長宗我部氏に仕えてたいへんに栄えた時期もありましたが、関ヶ原の戦いの後、四代目の父の時代には、「赤貧洗うがごとし」（*注1）という状態で、日々の食事も十分にとれないほどの貧しい暮らしでした。しかし、父の、

「貧しくても、心がしっかりしておれば、人間は苦しさの中でこそ立派な人格は育つ」

という信念のもと、父母の深い愛情を受けて育ちました。また幼いころより、神官職の父から神道（*注2）を学ぶだけでなく、古典文学の朗読を聞き、漢書の手ほどきを受けて、学問の力も身につけていきました。

四歳の時、一家で高知城下の山田町（現在の高知市はりまや町三丁目付近）に引っ越してからは、母方の祖父からも教えを受け

ます。この祖父からは、

「よいか、土佐にこのような書物があり、このような学問があるのは野中兼山先生のおかげである。忘れるでないぞ」

と、ことあるごとに兼山の考え方や、藩の各地に残る彼の功績について話を聞いたことが、丹三郎の胸に深く刻まれていきました。

九歳のころには、中国の書本である『小学』（*注3）や『四書』（*注4）を読み、十歳のころ常通寺という寺へ入門し仏教を学びます。

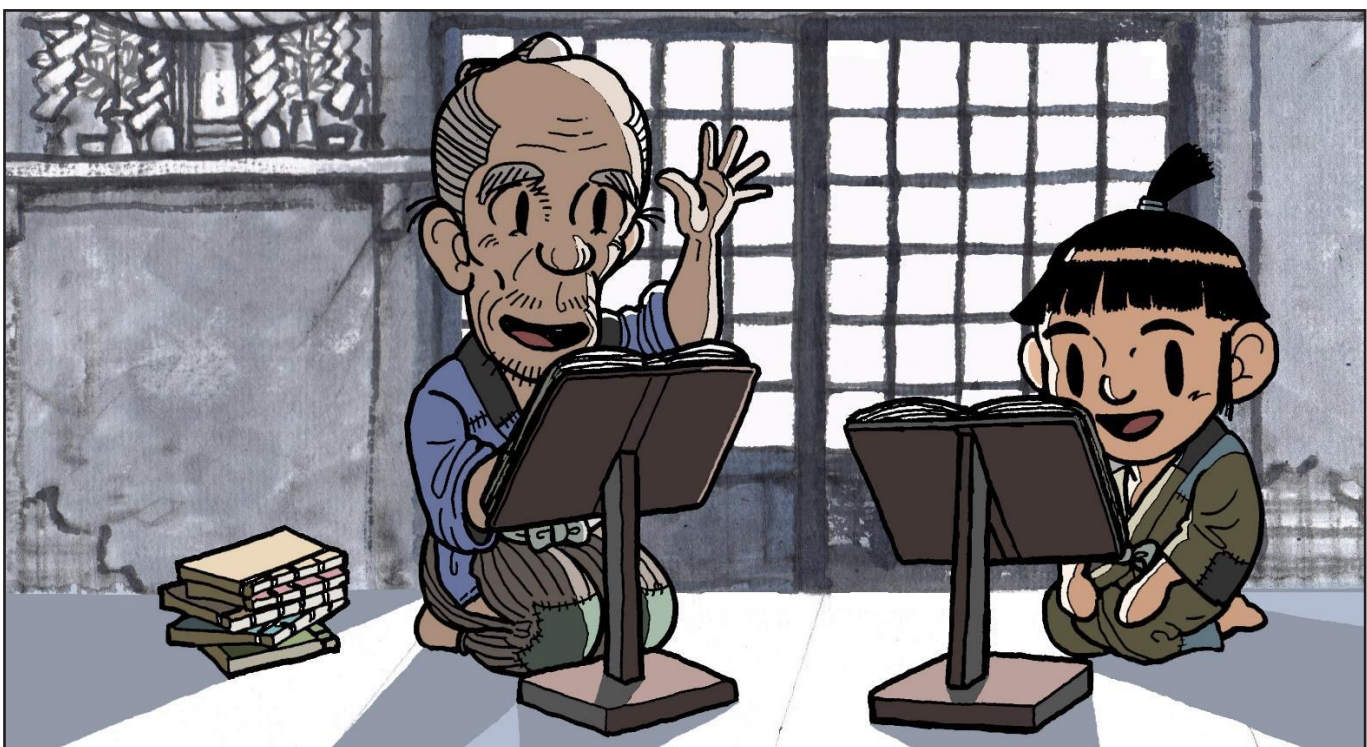
とてもかしこくて、努力もおこたらない丹三郎は、出会った学問から多くの刺激を受け、さらに成長していきました。この少年時代が、後々の学者としての基礎をつくっていったのです。

（*注1）「赤貧洗うがごとし」：たいへん貧しくて、洗い流したように何ひとつ所有物のないさま。

（*注2）神道：日本古来から伝承されてきた信仰思想。

（*注3）『小学』：中国の古典や古人の言行を引用した学生向けの儒教入門書で、江戸時代の土佐藩の教科書。

（*注4）『四書』：儒教（古代中国に生まれた思想）の基本的なテキスト。



エピソード① 素晴らしい記憶力

～お坊さんもびっくり～

おかあさんに背負われて高知の城下に出かけるたびに、店の看板や、のれんの文字を見て質問する小三次は、次々と『ことば』を覚えて帰ってくるので、家族はびっくり。

近所の染物屋が火事になり、染型がすべて燃えてしまつて困っていた時には、小三次が、記憶していた型のいくつかを描きあげ、それにヒントを得た染物屋は、型を作り直すことができました。おかげで染物屋は、店を再建することができ、たいへん喜ばれました。

お寺に入門して、わずか二カ月足らずでお経を暗唱してとなえたので、驚いたお坊さんはこう予言しました。

「これほど記憶力のよい子は珍しい。将来は大学者になるじやろう」

それを聞いたおとうさんは、たいへん喜んで、そんな息子を精一杯応援するようになりました。



山崎闇斎先生、おしえてつかあさい！

延宝七（1679）年、十七歳になった丹三郎は、これまでの勉強に物足りなさを感じ始めます。野中兼山らが進めた学問（南学）にあこがれていましたが、土佐を出て神道を学びたいと思うようになりました。

その費用を考えると簡単には言い出せず、思い悩む丹三郎に、

「心配するな。立派な学者となり、国のために尽くせ」

の言葉とともに、父は、親戚からの助けや少しの畑を売ったお金で資金を作り、送り出してくれたのでした。

父の言葉を胸に抱き、大きな夢と希望に燃えて京都に旅立った丹三郎は、兼山とも親交のあった学者 山崎闇斎の門下に入ります。闇斎は、土佐から来た若い学徒の入門をたいへん喜んで、特別に心を寄せてくれ、丹三郎もまた、全力で学問に打ち込みました。同じ門下には、後に師事（*注1）することになる浅見綱斎や、神道学と天文暦学（*注2）の師となる渋川春海がいました。

京都では、一筋に学問に打ち込みますが、眼を悪くして、

さらには学費も足りなくなったため、残念ながら一年で土佐に帰ることになりました。

「身は土佐に帰るとも、心は日本の空を見よ。南学の研究を成しとげることを願う。」

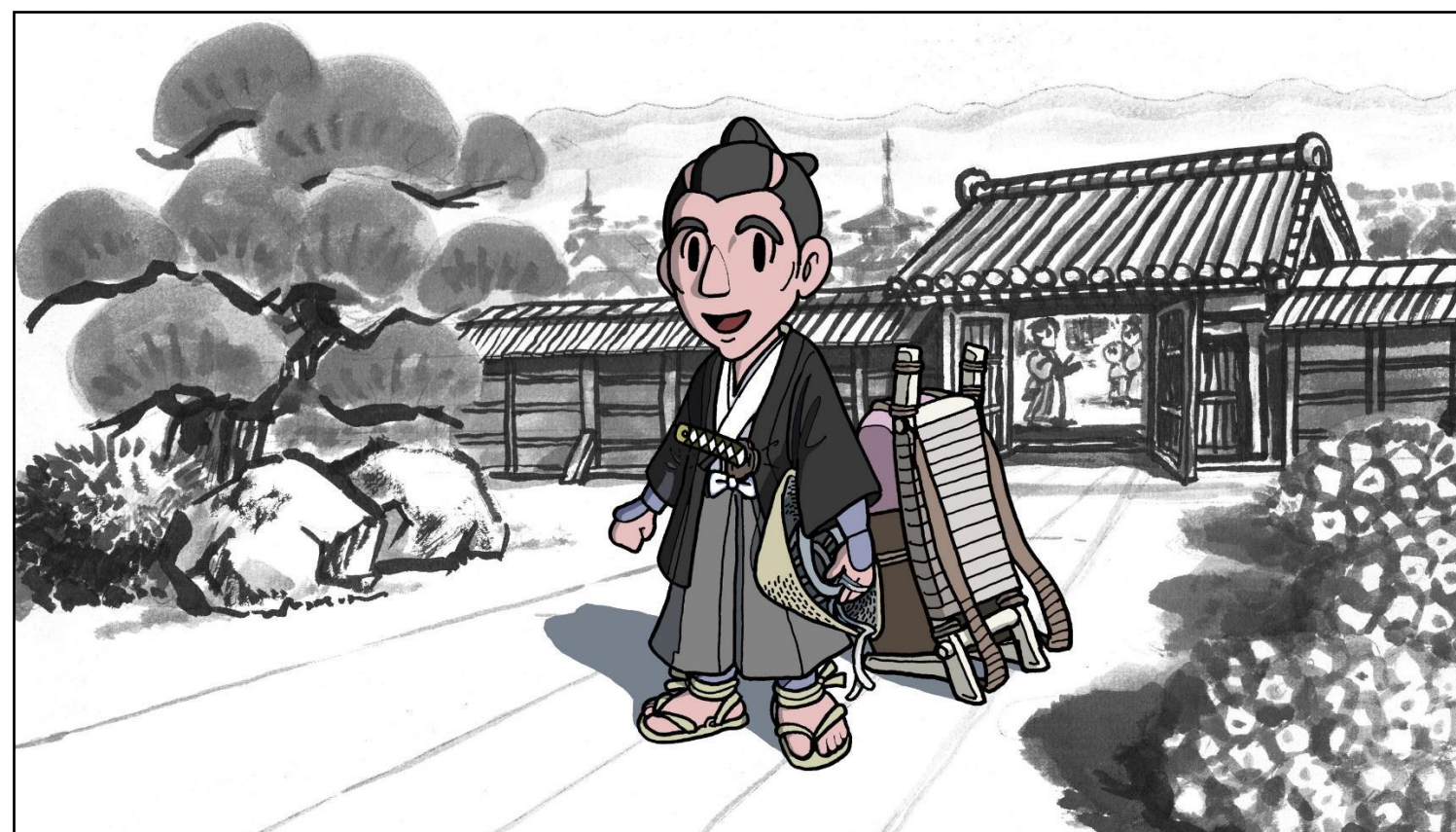
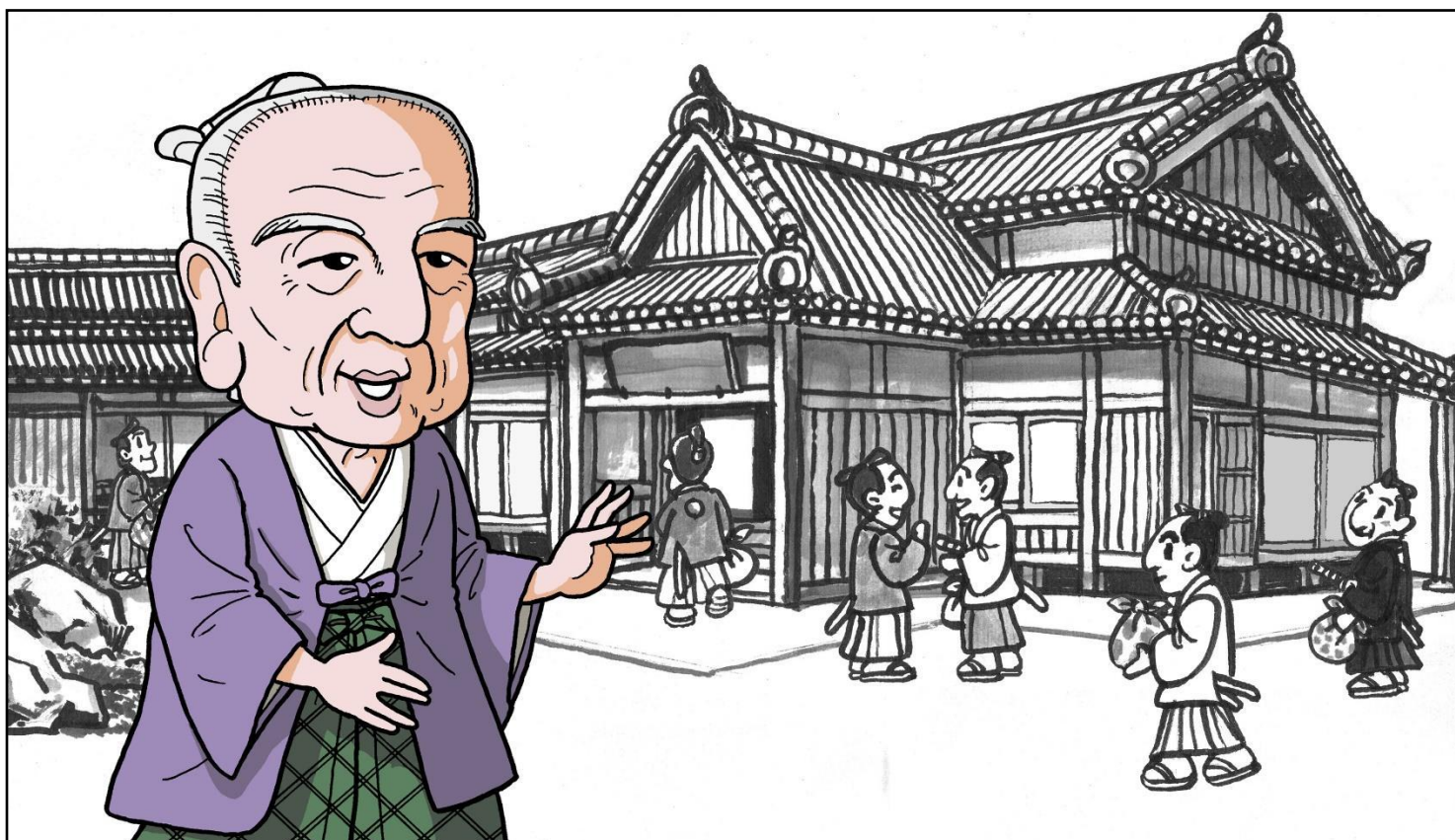
と闇斎から励まされ、帰ってからは南学の復興を果たそうと、儒学の研究に一層取り組むとともに、高知の城下で青年たちを集めて塾を開いて講義を行い、自身の考えを伝えていきました。そして自学自習の研究を続ける中で、わからないことを手紙で送り、闇斎から教えを受けることを続けました。

（*注1）師事…先生として尊敬し、その教えを受けること。

（*注2）天文暦学…天体の動きや事象、暦に関する学問。



京都市上京区に建つ「山崎闇斎邸跡」の碑。静かな住宅街の中にあります。



エピソード② 初めての 彗星観測

こんな話が残っているよ〜

延宝八（1680）年九月、十八歳のとき再び京都に戻りました。

しばらくたった冬のある日、山崎闇斎から塾生たちに声がかかりました。

「最近、夕刻の西南の空に客星（*注1）が現れた。渋川春海くんが観測を始めたので、皆で手伝って欲しい」

丹三郎は、客星という名は知っていましたが、本物をみたことはありません。いったいどんな星だろうと、教えられた時刻に、塾生たちと出かけると、そこは西の地平線まで広がる野原で、渾天儀や象限儀が（*注2）並べられていました。

夕暮れせまる西の空には、一番星の金星が輝いていました。

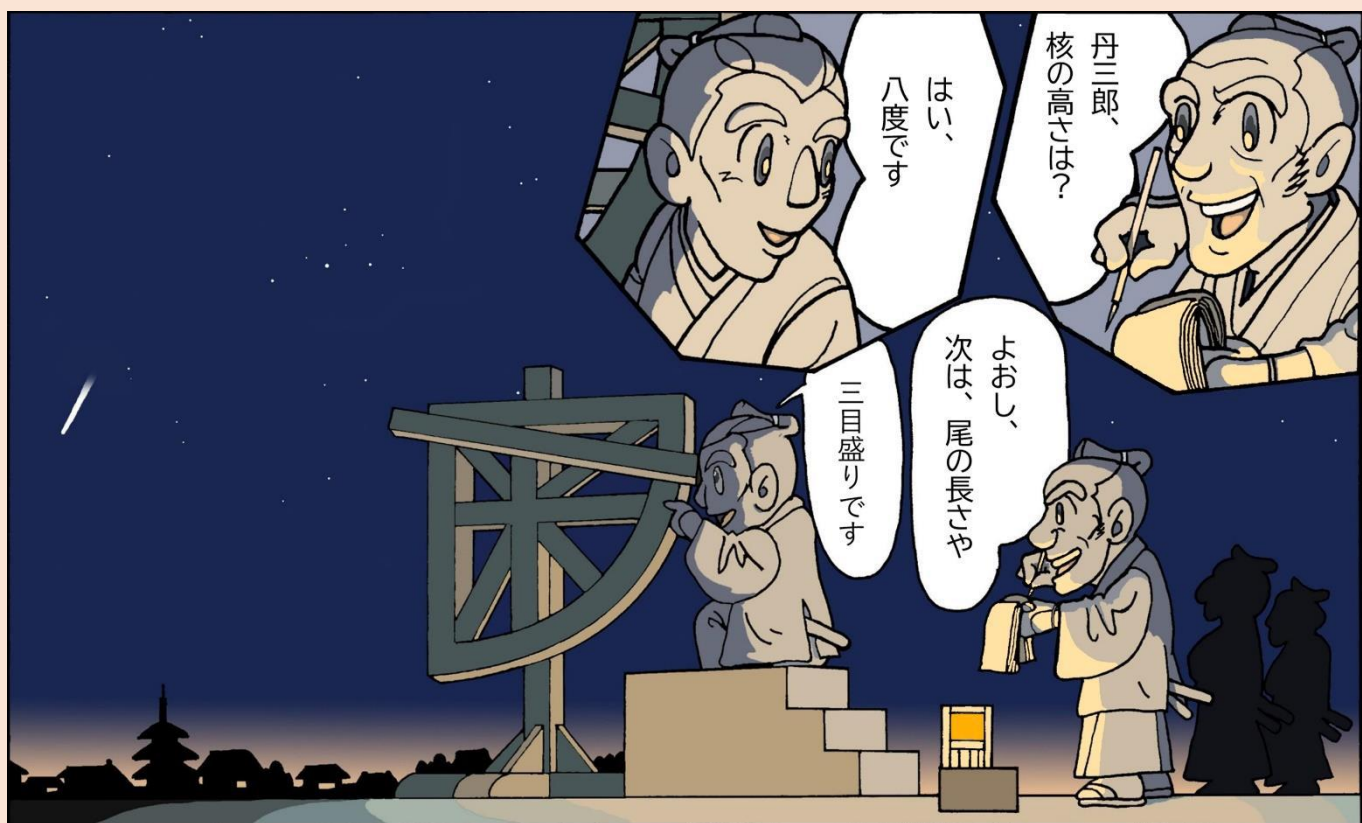
「象限儀をあの金星の右、西南西の方向に向けてくれ」

春海の指示で、塾生たちは象限儀を両手で持ち上げ、向きを西南西にして設置しました。春海が指さし叫びました。

「見え始めたぞー！」

そこには白く輝く長い尾を持った星がありました。

「これが客星というものか！」



その美しさに丹三郎は感動し、しばし眺めていました。

「核の高さと尾の長さを測ろう」

春海の指示で、象限儀の筒先が客星に向けられました。丹三郎は、象限儀の脇の目盛り環の数値を読み取りました。

「八度と三目盛です」

春海は、束ねた紙に記録し、また客星に目を向け、観測を続けました。

「昨日よりさらに尾が伸びた。毎日の伸び方も大きくなってきた。だんだんと太陽に近づいているのだ！」

丹三郎は、初めての天文観測を経験しながら、闇斎と春海との議論を聞き、書物で学ぶだけでなく、天文現象を実際に自分の目と身体で観測することの大切さを実感しました。

「春海さんは、中国の天文学者のようだ」と感じ、「私の天文学の先生としよう」と、決心したのでした。

（*注1）客星…古くからの『彗星』の呼び名。

（*注2）渾天儀・象限儀…19ページに説明あり。



丹三郎が京都で見た、当時の夜空に輝くキルヒ彗星

秦山は、ハレー彗星を見ちよらんの？

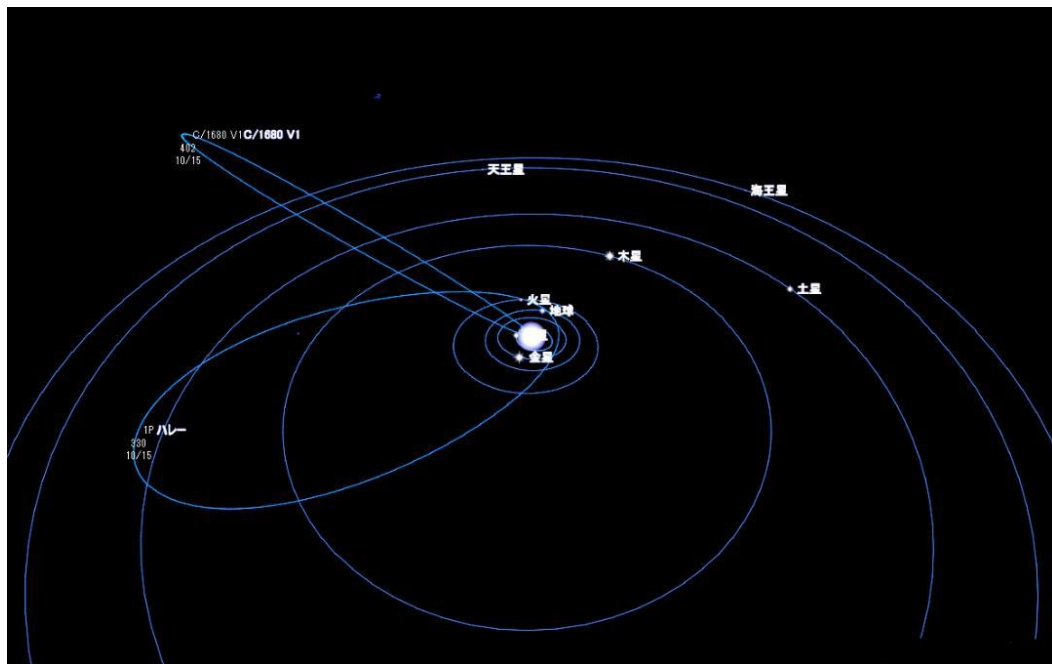
天和二（1682）年は、八月から九月にかけて、ハレー彗星が巡り帰ってきていましたが、丹三郎は記録に残していません。これはとても不思議なことです。何かあったのでしょうか。

丹三郎は、その二年前の延宝八（1680）年に京都で山崎闇斎や渋川春海、その塾生とともにキルヒ彗星を観察して、いくつかの観測記録を残しています。天文学入門の当初から彗星には強い関心をもっていたのです。尾も長く、光度は明るく二等もあり、世界中で騒がれ、日本でも多くの記録があるハレー彗星なのに、なぜ丹三郎の観測記録はないのです。

考えられるのは、この時期に丹三郎が精神的にも肉体的にも体調がすぐれなかったということです。確かに、二年前の四月に京都から眼の病で帰郷します。しかし、九月には再び上京しており、回復していたと思えます。ただ、翌年二月には、また土佐に帰郷し

なかったのでしょうか。

五年後に耳の病気を患っていて、『秦山集』には、「僕今年二十五歳、しかるに目くらく耳とどろき、ほとんど衰老（*注2）の人のごとし」



ハレー彗星とキルヒ彗星の軌道と、令和4（2022）年の現在位置（参考）

ています。

一方、話題になっていたハレー彗星の近日点通過であった九月十五日の頃は、恩師の闇斎が亡くなった日（九月十六日）とも重なり、そのショックが大きく、もし観測したとしても、記録をする気力を失っていたかもしれません。

十月には弔い（*注1）のため上京し、二カ月も滞在中にいます。大切な人を失った悲しみで観測どころでは



天和二（1682）年九月十五日当時のハレー彗星

と嘆いています。十八〜二十五歳にかけ、ひどい目の病気・耳の病気・マラリア熱の発作などに悩んでいたこともあり、やはり健康がすぐれず星の観測等はとても無理な状態だったのででしょうか。とても残念なことです。

号を「秦山」とするぜよ

天和三（1683）年、丹三郎が二十一歳の時、一家は高知城から北東に二キロメートルほど離れた秦泉寺村（現在の高知市北部、秦泉寺周辺）にある秦山のふもとに引っ越します。丹三郎は、自分の住む山の名にちなんで、自分の名を「秦山」と号する（*注3）ことにしました。「谷秦山」の誕生です。にぎやかな城下と違って田畑の広がる静かな里での暮らしは、心身ともに休まるものだったかもしれません。目や耳の病気、虚弱な身体と付き合いながら、ただひたすらに南学の研究を続けました。

（*注1）弔い…死を悲しみ、おくやみを言う。

（*注2）衰老…年を取って亡くなる。

（*注3）号する…名づける。称する。

第二の師、浅見綱斎との

出会いと別れ

恩師の山崎闇斎が亡くなった後、秦山にとって学問を続けるための先生が必要でした。

秦山は、初めて京都の闇斎塾で学んだ時に、同じ塾生だった浅見綱斎に師事したことがありました。綱斎は、闇斎塾を代表する秀才でしたが、闇斎との考え方の違いから、その後塾をやめていました。

秦山は恩師 闇斎の「豊富な知識や理想を養うためには、基礎となる儒教を学びなさい」という言葉を思い出し、儒学の教えを基本にしている綱斎に手紙を送りました。貞享元（1684）年、二十二歳のことです。

綱斎から手紙の返事は来ませんでしたでしたが、秦山は熱心に手紙を送り続け、五年後の元禄二（1689）年に、やっと返信が届き、入門を許されました。その後、約三年間にわたり秦山は、手紙で綱斎から教えを受けたのでした。

はじめのころは二人の関係は良好で、質疑応答だけで

なく学問についての情報提供や書籍の購入とその支払いの相談など、世話になりました。

ある時秦山は、神道の研究をやってみたいとの気持ちを書いた手紙を綱斎に送りました。儒学を通じて綱斎の考えを学んでいても、自分が求める神道学を進めていきたい強い思いを遠慮なく伝えたのです。

自分が信念とする考えを曲げることなく、必要と思えば反論し、互いの考え方の違いを認めたくて率直な意見を述べ、とことん議論をする…秦山の学問に対する姿勢でしたが、秦山の神道学、『古事記』（*注1）や『日本書紀』（*注2）などの研究は、中国的な思想にかたよっている綱斎とでは、お互いに受け入れることができず、自分の主義主張を通したため、師弟関係にはひびが入り、やがて二人の関係は途切れたのでした。

（*注1）『古事記』…奈良時代につくられた現存する日本最古の歴史書。文学書。

（*注2）『日本書紀』…日本最古の、天皇が自ら選んだ歴史書。

エピソード③

驚き！突然の綱斎との再会

秦山と綱斎は、お互いの考え方の違いから、激しい手紙のやり取りの末、元禄四（1691）年に交流を終わります。ところが、宝永元（1704）年五月二日、江戸からの帰り、京都に着いた秦山は、綱斎邸を突然訪問します。



京都市下京区に建つ「浅見綱斎邸跡」の碑。現在は、多くの人が行きかう商業地の中にあります。

ちよっこり、宿毛へ行てくるき

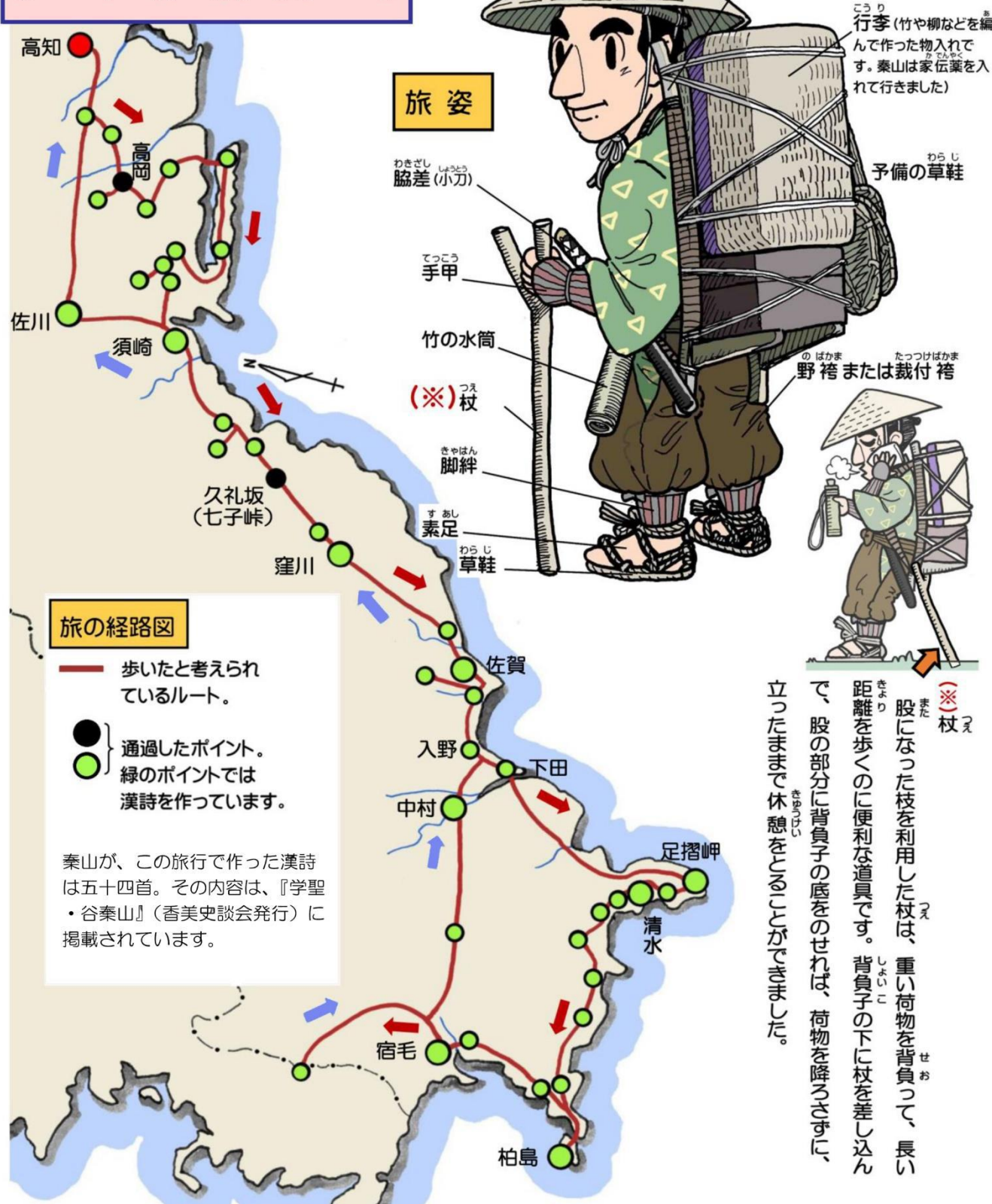
貧しいながらも、落ち着いた研究の日々が送れるようになると、秦山じんざんの胸の中に、幼いころ祖父から聞いた野中のなかけんざん兼山への思いがふくらんでいきました。兼山はすぐれた働きの一方、農民や武士の反感を招き失脚しつぎやく(*注1)したのち急死しますが、兼山の死後も家族は罪を負わされ宿毛すくもに幽閉ゆうへい(*注2)されていました。秦山は、せめて子どもたちだけでも赦免しゃめん(*注3)をと願い、手紙のやりとりを続けていましたが、いつかは対面をしたいと思っていました。また、兼山が行った立派な仕事を、自分の目で見てみたいという思いもあり、二十四歳のとき、念願であつた幡多地方はたちほう(高知県西部)への旅に出たのです。

貞享三（1686）年五月、秦山は背中には家伝薬じようきよの詰こまった行李こをくくりつけ、手甲てこ、脚絆きゃはん、わらじ履ばきのいでたちでした。薬の行商をしながら、長い旅の旅費にもあてるためです。

仁淀川の流域から久礼坂、窪川、佐賀の港、入野松原、
下田、そして柏島と、いたる所で兼山の手がけた大工事
しもだかしわじま

④ヒポンード

貞享三（1686）年五月～八月
秦山二十四歳 幡多地方への旅



あと
や事業跡に接し、気持ちをよんだ詩や文章を作りました。

この旅の様子が『西遊紀行』として残されています。

旅の途中、佐賀にいる奉行所（*注4）勤めの兄、又次郎またじろと久しぶりに会って励まし合い、その後目的地の宿毛に着いたのは、出発してから三十日目、真夏の太陽が照りつけるころでした。

宿で一夜を明かし、翌朝早く兼山の家族を訪ねました。
しかし竹矢来（＊注５）で囲まれた小さなわらぶきの家は
厳重な警備がされており、面会は許してもらえません。
すぐに宿毛領主に事情を話し、会えるようお願い出ました。
が認めてもらえませんでした。目的を果たせず高知に帰
り着いたのは、八月も終わりのころでした。

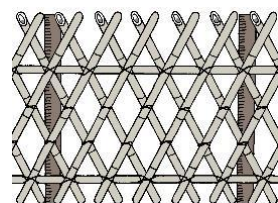
（＊注１）失脚…それまでの地位や立場を失うこと。
しつきやく

(＊注^{ゆうへい}2) 幽閉…人をある場所に閉じ込めて、外に出られないようにすること。

(＊注３) 赦免…罪を許し、罰を免除すること。
しやめん

(＊注4) 奉行所：今でいう役所。
ふぎようしょ

(*注5) 竹矢来…交差させた竹をあらく組んで
作った囲い。



竹矢来

兼山先生の子どもたちと

手紙をやりとりしよりしました

秦山は帰り着くとすぐに、兼山の三男・継業にあてて、訪問が不成功に終わったことを伝える手紙を書きました。旅の先々で改めて知った兼山への思い、家族たちへの激励が、二千字におよぶ大文章に込められています（『秦山集』）。

その手紙に深く感動した継業は、秦山に対し、学問や詩の指導を願い出て、その後死ぬまでの十年余り師事したのです。継業の妹の婉もまた、秦山からの手紙がただ一つの外界とのつながりであり、学問の支えでもありました。そののち、継業の死を知った秦山が婉に対し弔文（*注1）を送り、婉からは礼儀正しくていねいな礼状が届きます。これに対して秦山が返事を書いた手紙（『答安履亭夫人』）から、秦山と婉との手紙のやりとりが始まりました。

野中家の男児がすべて死去したのち、婉の姉妹は罪を



婉のきょうだいの墓が、近くのお寺・東福院にあります。婉は、高知市北高見町の野中家墓所に、父・兼山とともに眠っています。

つらなりし 梅の立枝 枯れゆけば
のこる梢の 涙なりけり

許されることになりました。婉は、生母、乳母（*注2）とともに宿毛を離れ、土佐郡朝倉村（現在の高知市朝倉）で新しい生活を始めました。

（*注1）弔文…人の死をなげき、悲しむ気持ちを述べた文。

（*注2）乳母…母親に代わって子どもの世話をする人。

エピソード⑤

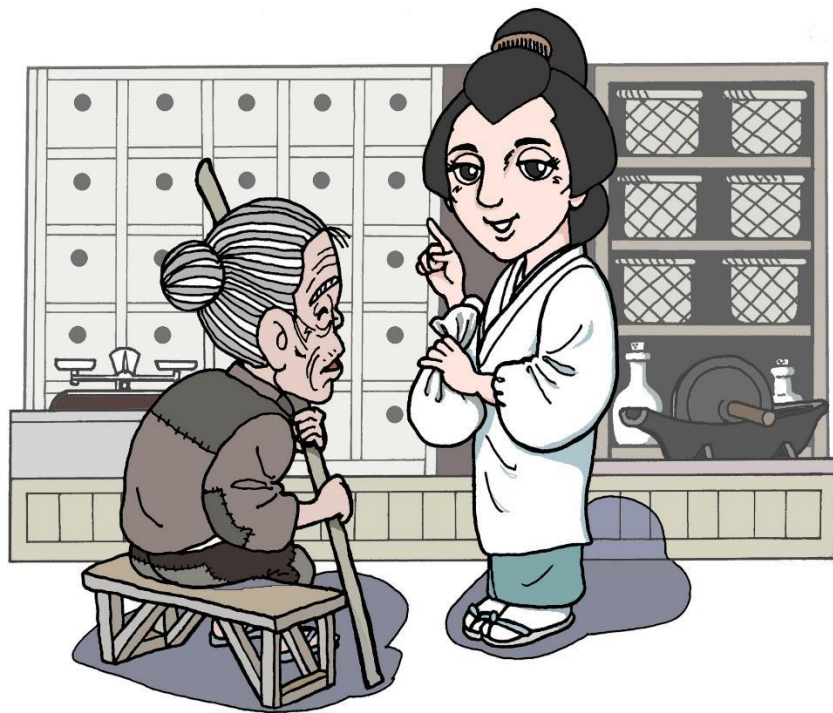
長く続いた

婉との交流

その後、
婉はどうなった？

自由の身となり新たな生活を始めた婉は、やがて医者として自立していきました。医学や薬学の知識を持っていた秦山の影響も大きかったと言われています。

手紙のやりとりでは、薬のこ
となどの意見交換もしており、
二十年にわたって続いた文通
は、二人の心の交流の場であり、
婉の人生を支える大きな力にな
りました。



高知市朝倉内にある婉が暮らした邸跡。奥に地元町内会が立てた、医者として住民に尽くした婉の業績を書いた案内板が見えます。



渋川春海先生に観測が

大切じやと教わりました

渋川春海は、貞享二（1685）年元旦をもって改暦した、日本独自の暦『貞享暦』を作ったことで知られていますが、秦山はこれを受け継いで伝えていきます。

『貞享暦』以前は、古い中国から伝わった『宣明暦』を基礎にしていた、日食などの予報にくるいが生じていました。春海は、日本の地で新しく観測した月や太陽、星の動きから、暦を作り直すべきだと主張して、天体観測とそれを元にした計算と理論で、日本独自の精度の高い『貞享暦』を作りあげたのでした。このため、『大和暦』ともよばれます。

春海に師事した秦山は、天体観測を基本とする観象授時（*注1）の天文暦学の重要さを知り、観測に基づく計算方法に重点をおきました。

圭表、渾天儀、百刻環、象限儀など多くの機器を使

い、日夜観測に励み精度の良い観測データを集めました。その観測に基づいた数値をもちいて毎年の暦をより良いものにしました。

そして、元禄十（1697）年、秦山は春海から「暦道の印可（*注2）」を得るようになりました。

『秦山集』には、

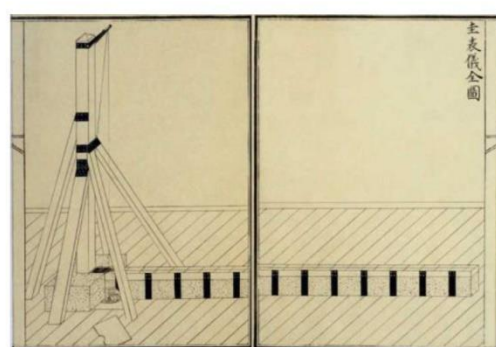
「思うに天文暦学を解き明かすには、観測し調べることにある。昔の人は日夜、想像をはたらかせてみるが、なお、その謎がとけないことに困りきっている」と、秦山の思いが述べられています。

今では、多くの研究者から「天文暦学を観測と計算による科学的な学問にした」と、二人の業績は高く評価されています。

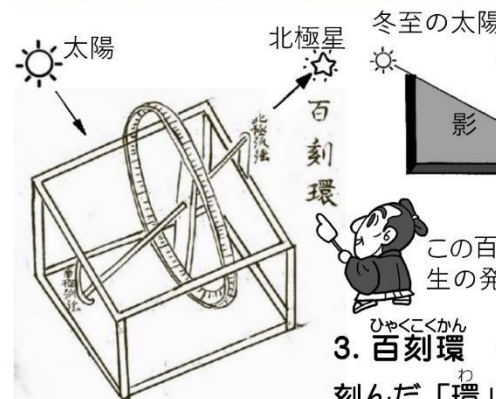
（*注1）観象授時：天文や気象についてよく観測をして、現れる自然現象についての説明や予報をすること。

（*注2）印可：弟子が師の教えを十分に理解して、自分のものにしたという証明・認可書。

秦山が使った天体観測機器



1. 圭表 太陽が南中した時の影の長さを測る装置。影が最も長くなるのが冬至で、暦の始まりを決めるのに利用しました。



圭表は、一般的なもので、長さが約4.2m、高さ約2.4mもあったんじゃない。

この百刻環と圭表は、渋川春海先生の発明じゃ。すごいじゃろ！

3. 百刻環 一日を百に分けた目盛りを刻んだ「環」に、北極星に向けた棒の影ができることで、時刻を知ることができました。

圭表・百刻環
国立天文台暦計算室「暦Wiki」



渾天儀 高知県立高知城歴史博物館所蔵

2. 渾天儀 天体（星）の位置を、赤経と赤緯で測ることができる装置です。

この渾天儀は、わしの息子・垣守の弟子の川谷薊山（けいざん）が作って藩主に献上したものじゃと。



4. 象限儀 四分儀ともいいます。水平からの星の高さ（角度）を測定する装置です。

この筒の望遠鏡で星をとらえるだけで、板にある目盛りで星の角度がわかるぞ。

象限儀 香取市伊能忠敬記念館所蔵

暦の歴史

日本では、古くから陰陽寮といわれる国の組織が、日食や彗星、流れ星などの出現で吉兆を占う占星術のような『暦』を用いてきましたが、平安時代の貞観四（862）年に中国で作られた暦『宣明暦』が伝わり、江戸時代の貞享元（1684）年までの823年間も使われていました。このため狂いが生じました。

渋川春海は「宣明暦、天に後る二日なる」と改暦を幕府に進言

し、貞享元（1684）年に、日本での天文観測などを元にした日本独自の暦『貞享暦』を完成させ、翌年公布されました。これを機に、暦の管理や星の位置測定や天体を観測する『江戸天文方』が幕府に設けられました。



↑『貞享暦』による暦の説明書

現在私たちが使っている暦は、太陽の運行を基準にした太陽暦という暦です。月の運行を基準にした『旧暦（太陰太陽暦）』の明治5年11月3日を『新暦（太陽暦）』の明治6年1月1日として、現在まで使われています。それでも、ズレが生じるため「西暦年号が4で割り切れる年（*注）」を『うるう年』として「1日」を補っています。

（*注）年号が、100で割り切れて400で割り切れない年は「平年」となります。



↑『宣明暦』の解説書月齢を解説している部分

エピソード⑥

大火事の後に、しし座流星群

～こんな記録もあったがよ～

秦山が、秦泉寺村に住んでいた三十六歳の時のことです。元禄十一（1698）年十月六日（現在の暦では、11月中旬）の昼過ぎに、城下の北奉公人町から出火し火事になります。折からの強風にあおられて燃え広がり、城から東側の役所の建物や屋敷、町民の家々を焼きつくし、夜の十時頃にやっと鎮火しました。焼き出された人々は、神様のお怒りかと恐れおののき、星空を見上げていると大きな流れ星（火球）が井宿（二ふたご座）に飛び込みました。それは数十度の長さの流星痕（*注）を残すほどでした。その後、大小さまざまな流星が数時間にわたり空いっぱい飛び交いました。

秦山は、星空の中を縦横に飛び交う流れ星を見て、
「それは布を織るようであった。人々はこれをながめ、心をいやされた」

と、書き残しています。

しし座流星群は、周期三十二・九年のテンペル・タット彗星を母彗星とする、有名な流星群です。流星群は、母彗星が軌道に残した塵が地球の大气に突入して生じます。最近では2001年に、大流星群が日本全国で見られました。



平成13（2001）年に高知で見られた、しし座流星群（川添 晃 さん撮影）

この日は、現代の暦では11月8日あたり、しし座流星群が出現する頃になります。

（*注）流星痕…流星が通った後に残る物質。淡く発光することがある。

秦山が記録した「大火事」と「流星群」

秦山が書き残した『壬癸録』には、この時の記録が残されています。（一部、虫食いのため不鮮明な文字があります。）

十月六日丁未午七刻壬佐北奉公人町失火延焼入郭内焼公屋十二所士館百七十餘宇城東不遺一字凡二十餘宇死傷甚衆亥時熄即夜大流星飛入井宿内垂下數人經數刻而消今夜流星如織人皆見之

谷重遠著『壬癸録』巻之八（抜粋）
（国立天文台所蔵）



高知城の北緯は、

三十三度半強じゃ！

さらに天文暦学を学びたい秦山は、江戸へ行って、渋川春海と面談したいと希望しましたが、土佐藩守 山内豊房公には認めてもらえませんでした。秦山はそれでも気落ちすることなく、京都で学んだ北極出地（北緯）の測定を地道に続け、高知城の緯度をより正確に決定します。元禄七（1694）年、三十二歳のことでした。

一般的に、北緯は北極星の高さ、つまり水平線からの北極星の角度で表わされます。しかし、北極星も不動と言われていますが、実際はわずかですが小さな円を描いています【図1】。このため、北極星の高さを測っても時間によって変化するため、北辰（真の北極）を測ることはできません。

そこで、秦山は中国から伝わった星図にある枢（北極星）と后（きり座三十二番）が北辰をはさんで南北に正対する（一直線に相対して並ぶ）ことが

どの恒星は、北辰の周りを反時計回りますが、后と南北に一直線に正対する位置を何度か測ると、回転の中心（北辰）の位置を測ることができるのです。

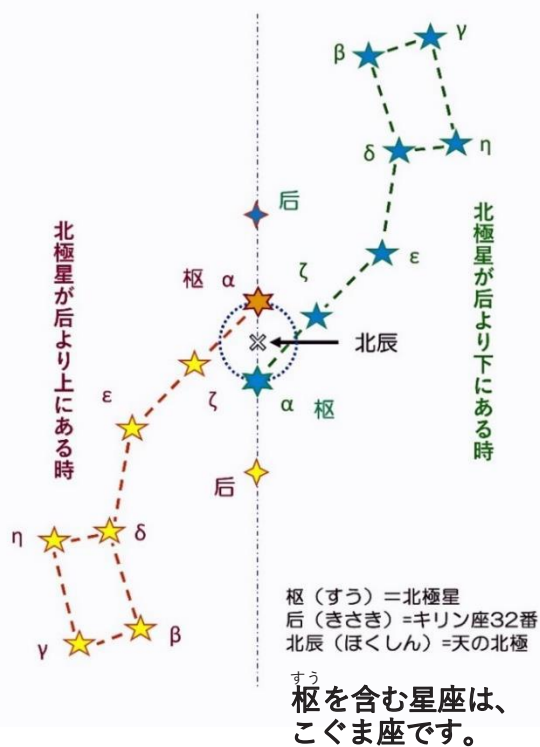
日本全国を測量したことで知られる伊能忠敬が、文化五（1808）年に土佐で、赤岡の緯度を「三十三度三十三分」、種崎の緯度を「三十三度三十四分」と測っていますが、谷秦山はその約百十年あまりも前に、高知城の緯度を決めていたのです。

高知市の江ノ口川には、日本測量基準で「北緯三十三度

【図2】

北辰（天の北極）の位置＝北緯の決め方

北極星（枢）と麒麟座32星（后）が、南北一直線に並ぶのを利用した。



【図1】北極星の周回運動

ら、この二つの星が一日に二回正対することを使って測ることで、枢と北辰の位置を正確に決めました。これによって「北辰の高さ＝高知城の緯度は三十三度半強である」ことをついに決定します。この忍耐強い観測には三年かかりました。

秦山が使った枢と后の位置を示したのが【図2】です。

枢は北極星で、こぐま座のα（アルファ）星です。枢な

三十三分、東経百三十三度三十三分」の位置になる場所があり、『地球三十三番地』という記念碑が建てられて、イベントなどが行われています。



ヘッド⑦

ゆるなる高みを

目指しちゆじきー！

この漢詩は、現在の香美市土佐山田町秦山町にある秦山邸跡の詩碑に刻まれている、三首の漢詩の中のひとつです。元禄七（1694）年に秦山が、高知城の緯度を「北緯」三十三度半強であることを発見した後、元禄十（1697）年に作った詩です。

暑熱

北辰出地三三度

暑熱可知冠日東

寒玉秋狐皆漫語

収襟反覆詠南風

【意味訳】

北極星が地平線より三十三度の高さにある。こゝは北緯三十三度の地であるから、夏の暑さは日本の中でも格別である。竹やまわりの人々は皆「暑い暑い」と、たわいもなく言い合っているが、こんな時期こそ私は襟を合わせて、繰り返し、繰り返して南学の研究に励もう、いや励まなければならぬ。

何事もあいまいにせず、より正確さを求める秦山は、天体観測にも工夫や情熱を注ぎ続けました。

「まだおかしい」「なぜじゃろ？」

「いや、もう一度確かめよう」・・・

と、日夜、観測と計測を繰り返して、ついに高知城の緯度を「三十三度半強」だと決定したのでした。

しかし秦山は、このような大きな発見をしたことに浮かれてはいませんでした。

暑さ厳しい夏の中にあっても、

「まだまだ道半ば。何をしても、南学の研究こそが我々の本当に目指すところなのだ」

と、大発見を喜んでいる弟子や周囲の人々にも、そして自分自身にも言い聞かせているのです。

この詩からは、学び探究する秦山の強い覚悟が伝わってきます。



土佐山田町秦山町の秦山邸跡にある詩碑



（*注）行水…夏の暑いときなどに、湯や水をたらいに汲み、汗を流す入浴法。

米を持ち寄ろう、秦山先生のために！

現在のように簡単に情報を手に入れることができない時代、遠く離れた江戸と土佐では、研究を続けるのに、たいへん苦心しました。あいかわらず貧しい暮らしの中で、研究に費やせるお金も十分ではありませんでした。秦山は、天文に関する良い本があると聞けば、少ない家財道具を売り払って購入し、高価な観測機器は、完成品でなく部品を買い集め、足りない部品は自分で作って組み立てました。

学者とは言え恵まれた環境ではない中で、ただ一心に研究を続ける秦山の姿勢は、弟子や知人たちの心を動かし、「先生の研究生生活を助けよう」といった声が出てきました。十数名が計画して「書籍講」という仕組みを作り、毎年一人が米一俵を持ち寄って、それを積み立てて共同研究の財源としたのです。これは、実際には、秦山の貧乏暮らしを助け、研究を続けられるように援助するものでした。

この仕組みは、元禄四（1691）年から元禄

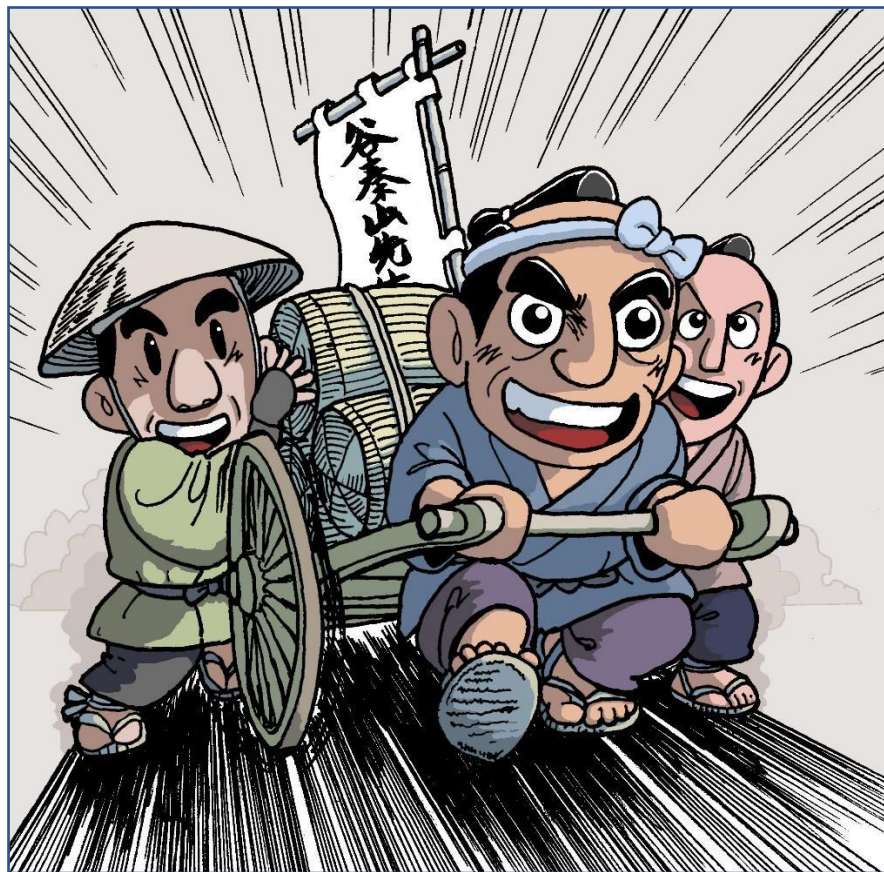
新しい生活がはじまったぜよ

元禄十（1697）年、三十五歳の秦山は結婚して自分の家庭を持つことになりました。翌年には長男・垣守が生まれます。谷家から分家（*注1）することとなった秦山一家は、秦泉寺村の家を離れ、山田村（現在の香美市土佐山田町秦山町）に移りました。弟子たちは新居づくりを手伝い、また引越してから、高知城下から約二十キロメートルの道を通って教えを受けました。移住先を山田村に決めたのは、庄屋（*注2）を代々続けた親戚の「山田の谷家」を頼ったからではないか、と言われています。この三兄弟がそれぞれ立派になっ

たことを秦山は知っており、三兄弟の方も、親族が立派な学者として貧しい中で頑張っていることを知り、互いに親近感を持っていました。

学者として大きな功績を築いてきた秦山でしたが、生涯健康には恵まれず、幼いころから続く目や耳の病氣、また肺結核との闘いなど、生活は常に苦しい状態でした。学問を続ける上での援助や精神的支えを、親戚のい

十三（1700）年まで続けられ、その間におよそ米百俵ほどが積み立てられて、多くの書籍や観測機器を購入する資金になりました。こうして購入したものは、秦泉寺村の秦山の家に集め、秦山だけでなく、弟子たちともに、研究や観測に活用されました。



る山田村に求めたのでした。

秦山の残した詩や文章は、漢字で書いた漢文です。若い頃、野中兼山の足跡をたどって宿毛まで旅をした際や、その後旅行に出かけるたびに、詩や文章を残しました。『西遊紀行』『東遊紀行』など、生涯二十二回の旅行で作った詩の数は五百六十五首にのぼり、これらはすべて漢字で書かれています。目の前の光景や風景を見ながら、漢字だけで詩や文章を作るのですから、表現したいことを意味する漢字をたくさん知っていなければ書けません。しかし、幼いころより中国の書物を読み込み、漢字が学問の基礎だった秦山には、自然なことでした。これは、秦山が積み重ねてきた知識や教養の高さ、考え方の深さが表われたかたちでもあります。

（*注1）分家：親族の中心となる本家から分かれた家。

（*注2）庄屋：江戸時代に、村政を担当した村の長。

今の村長にあたる

ヘッド⑧

わしは鏡野が大好きじゃ！

元禄十三（1700）年、三十八歳の秦山は、妻と幼い長男を連れて、山田村に引っ越ししました。

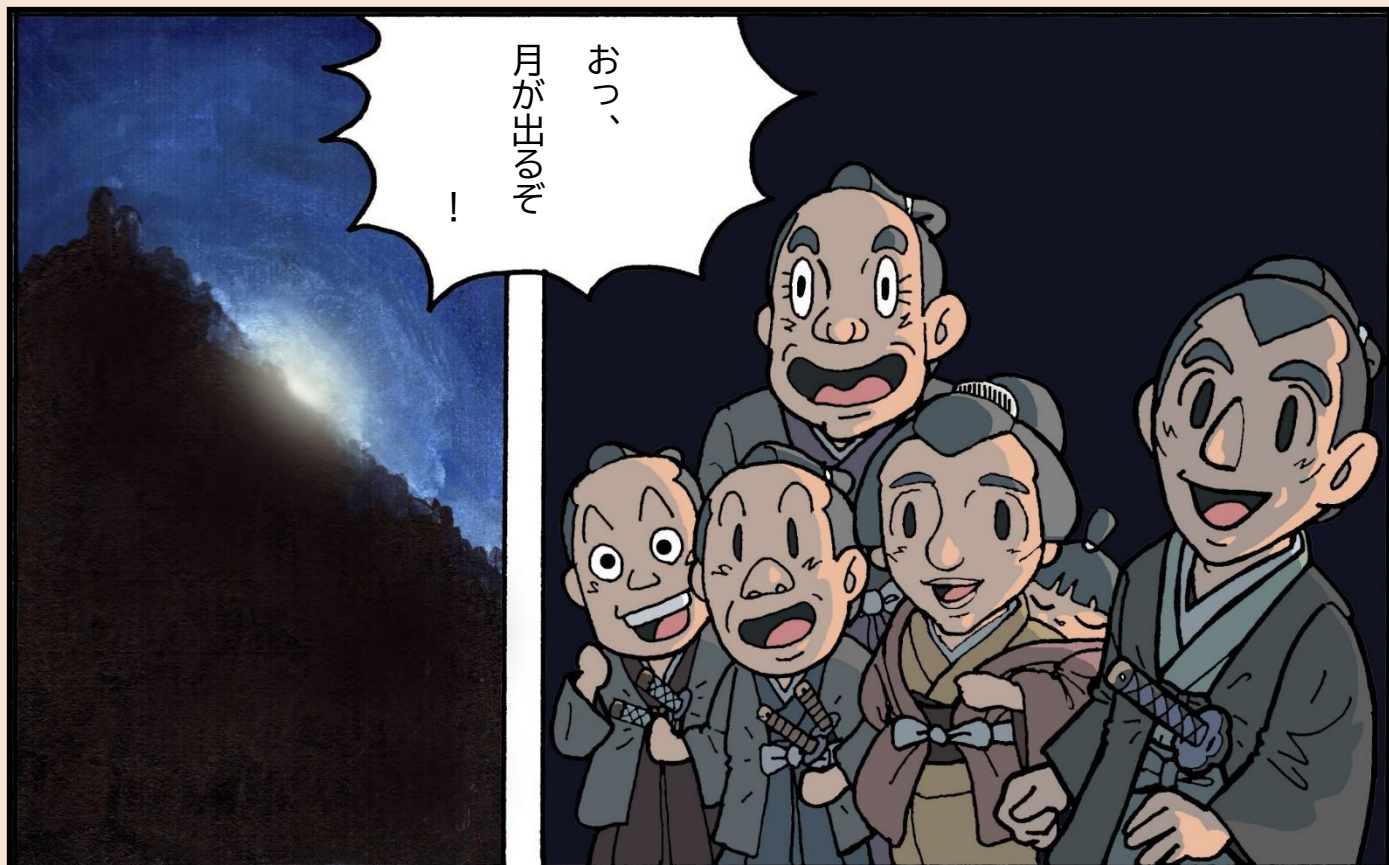
これは、引っ越した時に秦山が作った漢詩です。この詩も、現在の秦山邸跡の詩碑に刻まれている一首です。

仲秋

満輪鏡野露花浮
三五寒光伴独幽
斯地卜居豈無意
崑峯明月約千秋

【意味訳】

仲秋の名月に照らされた鏡野には夜露が光って花のように美しく、十五夜の月の光は私に幽玄さを感じさせてくれる。この地に住居を構えたのには理由があつたのである。峯の昇つた明るく清らかな月とともに、いつまでも今のようによい心で暮らしたいものだ。



「美しい鏡野の地で、いつまでも静かに暮らしたい」という、秦山の気持ちがよく表れています。

日が暮れて、小高い丘の上に立つと、目の前に満月の光をあびてかやく家並みや広大な台地が広がっていました。

「どうじゃ、美しいゆつて

静かな良い土地じゃろう。まさに鏡野じゃ！」

秦山の言葉に、妻も、引っ越しを手伝った弟子たちも、思わずうなずきました。



やっと、渋川先生にお会いできました

秦山は、元禄七（1694）年、三十二歳の時に、渋川春海に手紙を送り、江戸で直接に教えを受けたいと申し出ました。この時の手紙には、「延宝八（1680）年の冬に、京都で山崎闇斎先生といっしょに観測をして、そのとき春海を生涯の先生とすることを決めたこと」などが述べられています。しかし、その後数カ月、手紙のやり取りをしますが、江戸行きは実現しませんでした。主君の山内豊房公から許しがでなかったのです。そこで、秦山は手紙での教えを受ける形で入門します。それから十年、天文暦学と神道学の両面で、手紙を通じた通信教育で、ていねいな教えを受けます。手紙の内容からは、師弟の愛情に満ちた教育であったことがわかります。

秦山は、この通信教育の詳しい記録を『天柱密談』として残しています。

そして元禄十七（1704）年、秦山四十二歳の時に、やっと許しが出て、念願だった春海を江戸に訪ねます。二月十二日に山田の自宅を出発し、三月七日に江戸に到着。その翌日、駿河台（*注1）に春海を訪ね、渋川父子に対面します。その時のようですが、『新蘆面命』（*注2）という日記に書かれています。

【意味訳】

「助左衛門殿（＝春海の通称）は、六十歳あまりのやせた老人で、飾り気のないまじめな方で、文字一つ知らなさそうな人に見えた。あの人が、これまでに大切なことを教えてくれた人だったのかと、驚くばかりであった。そばにいた、息子の図書殿（＝春海の息子の名前）は、かしこそうな若者であった」

春海の人となりを見たままに書いており、秦山の素直な感想は、すがすがしくもあります。

秦山は、約一カ月間江戸に滞在して、春海から直接に

秦山の人柄が判る『天柱密談』

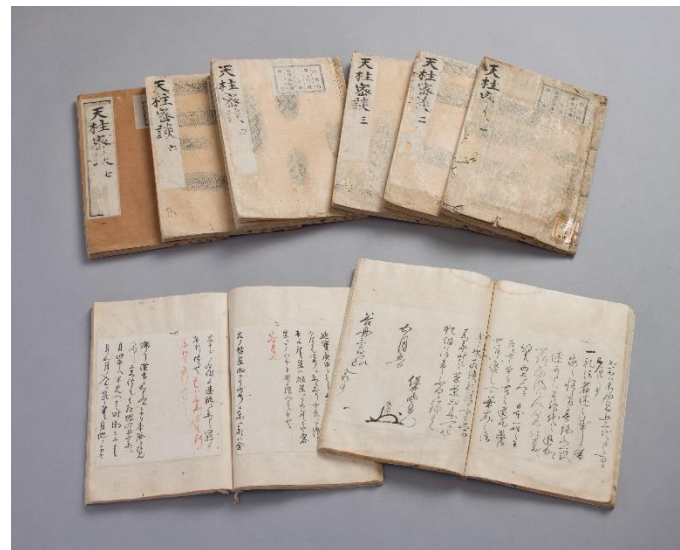
十年間にわたる渋川春海との通信教育は、秦山にとってかけがえのない時間でした。

秦山は、春海とやり取りした手紙を、年ごとに整理し、質問の回答や添削（*注）してもらった原稿を、部門ごとに別冊を作りまとめています。また、送った日、届いた日を書き記し、しっかりと管理していました。

秦山は、数日間続けて、手紙や質問を書いて送ることもありました。春海のもとには、次々に質問や添削依頼が届きましたが、春海は長く手元にためておいてから、まとめて返していたようです。返事がないことに気をもんだ秦山は、問い合わせの手紙も送っていました。

これは、二人の手紙のやりとりの一部を現代語訳したものです。

「まだお返事が届いていない手紙のリストです」（秦山）
「チェックしましたよ。（大体まだ手元にあります）」（春海）



天柱密談 高知県立高知城歴史博物館所蔵

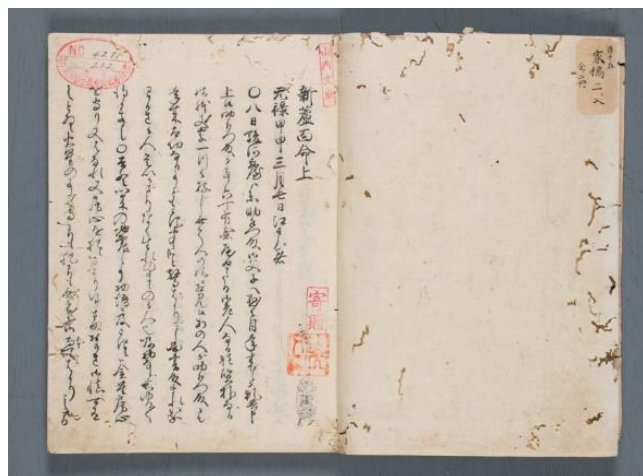
「もっともっと、学びたいことがたくさんあります」（秦山）

「提出が多くて添削が追いつきません」「貞享暦（じょうきょうれき）の計算が全部終わったとのこと。さぞ大変だったことでしょう」（春海）

（*注）添削…文章や答案などを書き加えたり削ったりして改め直すこと

教えを受けることができました。秦山の研究はこの江戸での学習で完成し、この後、土佐に戻り、弟子の教育・天体観測・南学の確立にと活躍することになります。現代においても、秦山の残した記録は、江戸時代の天文学と渋川春海を研究する上で、欠かすことのできない貴重な資料になっています。

（*注1）駿河台：現在の東京都千代田区神田駿河台付近。元禄十六（1703）年に、春海が幕府の協力を得て、天文台を開設していた。
（*注2）『新蘆面命』：新蘆とは春海の号、面命とはていねいに教えること。



谷重遠著『新蘆面命』
高知県立高知城歴史博物館所蔵
山内文庫（谷家本）

エピソード⑨

秦山が学んだ天文暦学

当時の天文暦学には、『占星術（星占い）的な天文学』や『自然科学的な天文学』など、いくつかの分野がありました。秦山、渋川春海が共に共感しあっていたのは、主に後者でした。二人は天体の運行などの現象や、天文機器を用いた観測や計算に基づいた方法に重きをおいていました。秦山は土佐に戻ってから多くの観測機器を購入しています。

もちろん、中国から伝わった天文暦学ですから、占星術や風水（運氣）の影響は当然あります。江戸遊学で春海に学ぶ中で、二人が真面目に議論した記録が残っています。

「金星が房心（ハルツェ座）に入ったり出たりしていたので、どうしたらよいのか困って正確な占いができなかった」とか、

「近年、火星が房心を過ぎたので、火災などが多くあるだろうから注意しないといけない」

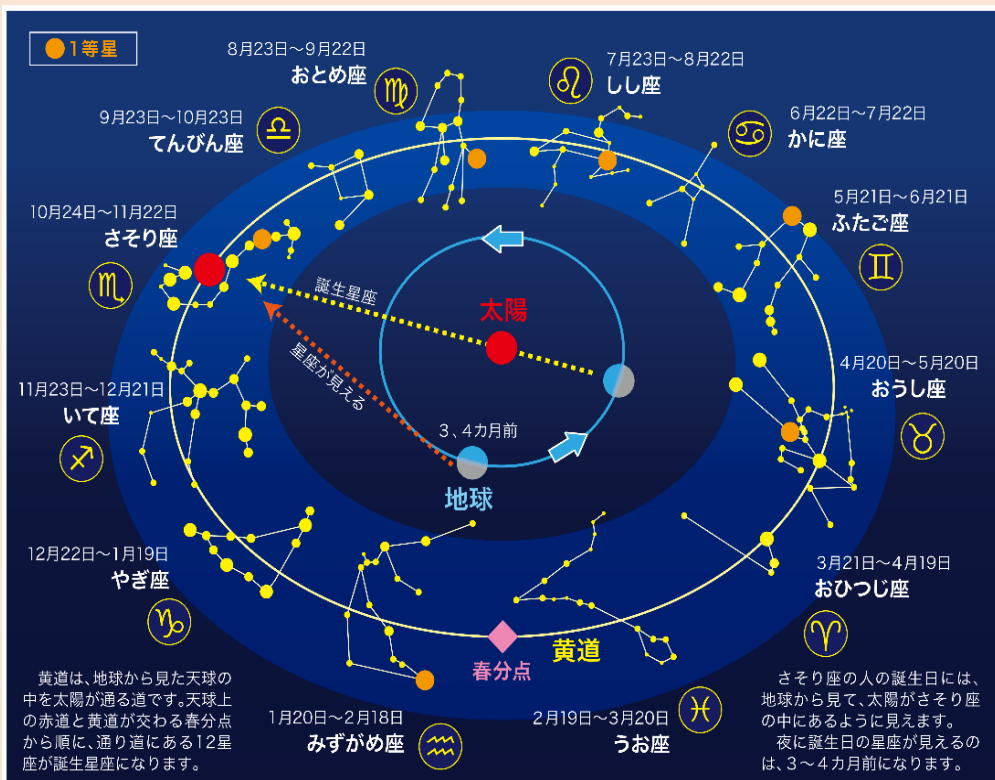
「しかし、火災は起きてても大地震は起きない」などというものです。金星、火星の運行と社会の出来事が関係していると信じていたのです。しし座流星群と大火の関係もしっかり記録しているわけです。このことから、二人が観測を重

わしが何をしたというんじゃ・・・

山田村に帰ってきてからは、江戸での学問的成果の発表や講義、本にまとめる作業など、忙しい日々が待っていました。藩主豊房公からの命を受けて、二年間にわたる調査の末、宝永三（1706）年に『土佐国式社考』を書きあげました。魂を注いだこの著書は、秦山の代表作でもあります。

秦山が学者として花開いた時代は、豊房公の厚い信頼のもとにありました。しかし、豊房公の突然の死によって、思いもかけない出来事にまきこまれます。藩主交代にかかわる事件に関与したとして罪を問われ、自宅蟄居（*注1）という厳しい処分を受けることになったのです。宝永四（1707）年、秦山四十五歳のことです。

実際は、土佐藩の一部の者たちが、秦山の学問を排斥（*注2）しようとした無実の罪でした。蟄居生活はその後十年以上にもおよびました。



誕生日の12星座説明図

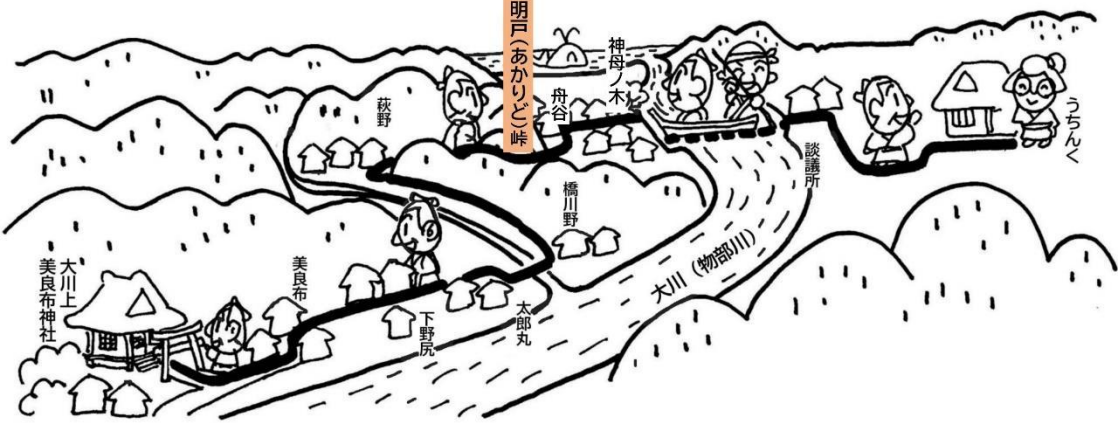
視する第一級の科学者でありながら、占星術的な面も持ち合わせていたことがわかります。

さらに科学が進んだ現代に暮らす皆さんにとっては、こんな会話を真剣にしている二人の大人の姿を想像すると、きつとおかし

く思われるのではないだろうか。

川上様へ取材に行ったぜよ！

『土佐国式社考』は、平安時代に書かれた書物『延喜式』の神名帳に登録された神社（延喜式内社という）で、土佐にある全二十一の神社を調査・考証した秦山の著書です。香美市からは、香北町の大川上美良布神社と、物部町の小松神社が含まれています。



秦山は元禄十五（1702）年一月八日に、下の図のようなルートで大川上美良布神社を調査に行っています。この執筆を、第五代藩主の豊房公は、自らが命じることで応援します。その甲斐もあって、秦山は完成させることができましたが、まもなく豊房公は病気で亡くなってしまいます。

（*注1）蟄居：江戸時代、武士や公家に科した刑罰の一つ。外出を禁じ自宅謹慎を命じた。
（*注2）排斥：押しつけ、しりぞけること。

エピソード⑩

蟄居生活は、家族との大切な時間じゃった

正徳四（1714）年、蟄居生活も八年になった中で五十二歳の秦山が作った漢詩です。この詩も、現在の秦山邸跡の詩碑に刻まれている一首です。

甲午除夜

罪籍未除歳八去
迎花送雪意駸々
窮通何止一炊黍
萬古浩然天地心

【意味訳】

無実の罪はまだ許されないまま八年が過ぎてしまった。花咲く春を迎え、雪降る冬を見送りながら年月の流れの速さにただ驚くばかりである。世の中の栄枯盛衰（*注1）はいつも、どこでもあり、はかないもので、一鍋の黍雑炊を炊くわずかな時間の出来事であるから、私は大昔から浩然（*注2）と開けている天地のような広い気持ちでいよう。

無実の罪をきせられ、その罪を解かれることもなく月日は過ぎていきました。どんなにづらい日々だったかと想像できます。ただ、秦山はそんな日々の中でも、今はそれを受け入れるしかないが、いつかは真実が認められる日が来る、と信じ続けていました。

秦山は、蟄居の間、子どもたちと過ごす時間を大切にしました。子どもたちに伝記本などを読ませ、自分はあぐらをかいてこれを聞き、やがて着物を整え正座すると、自ら『論語』や『孟子』（*注3）を講義することもありました。昼間は、子どもたちが外に出かけて見慣れぬ草や変わった魚をとって帰宅するとすぐに調べ、夜には子どもたちに読書をさせ、世の中のこと、人の生き方について延々と説く。晴れた夜はともに庭を歩き、空を見上げ星や月を見る。このような子どもたちとの関わりは、秦山が子どもの頃に、父から教えられた学問への姿勢が受け継がれている様子がうかがえます。

（*注1） 栄枯盛衰…栄えることとおちることをいふ。

（*注2） 浩然…心などが広くゆったりしているさま。

（*注3） 論語、孟子…どちらも中国の儒教の経本で、四書のひとつ。

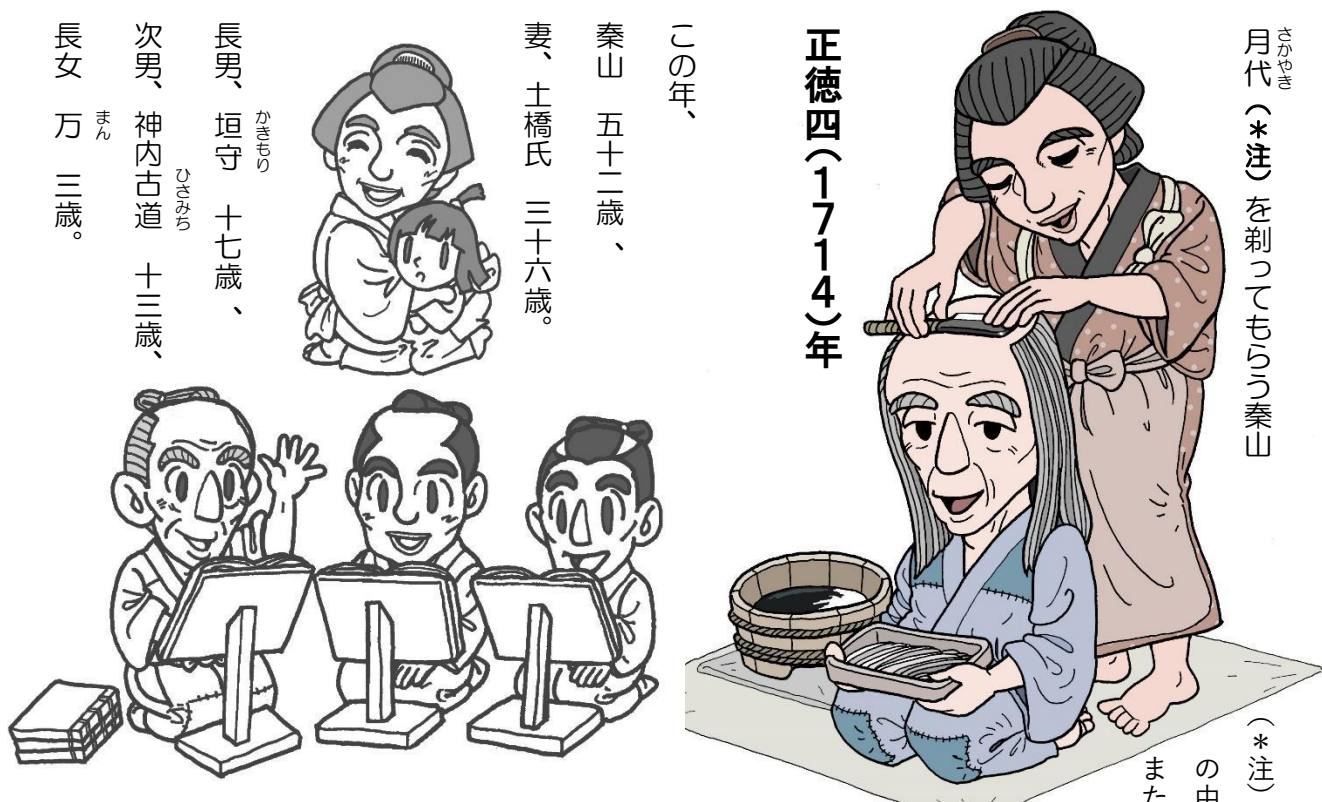
月代（*注）を剃ってもらう秦山

正徳四（1714）年

この年、

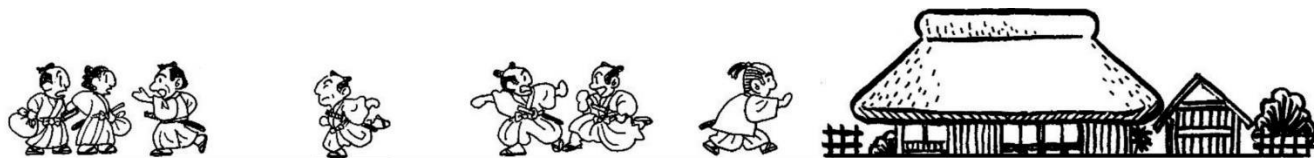
秦山 五十二歳、
妻、土橋氏 三十六歳。

長男、垣守 十七歳、
次男、神内古道 十三歳、
長女 万 三歳。



（*注） 月代：近世、成人男子が額から頭の中ほどにかけて髪を剃り落したこと。またはその部分。





秦山の死去に、弟子たちは力を合わせました



享保三（1718）年六月三十日昼過ぎ、秦山死去。

秦山死去の知らせを受け、弟子たちは手分けをして葬儀の準備に走る。



秦山の罪は解かれていないことから、まず藩に秦山の死去を届け出て、葬儀ができるように許可をとった。

秦山が生前、自身の葬儀をお願いしたいと言っていた複数の寺に相談をするが、全て断られる。

弟子たちは話し合い、やむを得ず、墓の場所を前山のぐいみ谷に、葬儀は地元の山田町中町の超願寺に頼み込んで行ってもらうことにした。

ぐいみ谷の墓地では、土葬用の深い墓穴を掘った。



七月二日の昼ごろ、超願寺で簡素な葬儀を行う。出棺を日没後に予定していたが、降雨のため遅らせることにした。

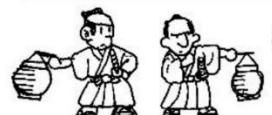
同夜七ツ時（*注）に出棺。棺をぐいみ谷の墓地へ埋葬した。



埋葬後の数日間、弟子たちが交代で墓番を行った。



すべての葬儀の手続きや作業を、弟子たちが密やかに手際よく行いました。この時代の埋葬は、土葬が一般的で、墓穴掘りや、納棺・出棺・埋葬など、地域ごとに専門的な知識を持った人物がいたと考えられます。弟子の中にも、経験や知識を持った人がいたのかも知れません。現代ほど連絡手段のない時代にあって、死去から埋葬まで手際よく行えたことは、まさに弟子たちのチームワークの結果だと思います。



（*注）七ツ時…現在の時間で午前4時頃。江戸時代は、日付の変更を夜明け（明け六ツ）とともにいった。



「死んでゆくのかしらん・・・」（*注1）

蟄居生活は、収入もなく日々の食事にも困るほど、たいへんな状況でした。秦山の子もたちは、順調に育っていた長男・垣守と長女の万をのぞき、蟄居生活の中でわずか八年の間に、子どもたちが続けて亡くなっています。蟄居が始まった翌年に三男（四歳）、その三年後に五男（生後三日）、その二年後には四男（六歳）、またその二年後に次男（十四歳）が、栄養失調や病気で命を落としました。秦山と、その妻の悲しみはどれほどのものだったことでしょう。

しかし、その置かれた状況に弱音をほくことなく、「本当かうそかは、知る者ぞ知る。何時の日か疑いが晴れるであろう」

と、罪に従った秦山でした。昼は読書し、成果を書にまとめ、夜は天体観測を行う日々を静かに過ごしていました。妻もまた秦山を支えるために、苦しい生活に耐えながら連れそいました。

不自由な生活や貧困に苦しみ、たび重なる家族の不幸を

乗り越え、ただひたすらに学

問研究に打ち込んだ秦山でしたが、長い蟄居生活で心身ともに衰えていきました。

享保二（1717）年、

脳卒中（*注2）の発作を起こ

して左半身不随（*注3）と

なります。翌年、藩から外

出を許され、ほっとしたもの

つかの間、再び発作を起こ

してこの世を去ります。享保三（1718）年六月三十日、秦山五十六歳、罪は解かれないままでした。



（*注1）：二度目の発作に襲われた秦山が、最期に発した言葉。

（*注2）脳卒中：脳血管の障害により急激に意識を失い、手足などにマヒを起こす病気。

（*注3）不随：身体がマヒし、思うように動かなくなるこ

わしがやってきたことが、 役に立ちよるがか・・・？

秦山じんざんの罪が解かれたのは嘉永元かえい（1848）年、亡なくなってから百三十年後のことでした。無実の罪を明らかにされないまま人生を閉じた秦山でしたが、秦山が最後まで貫ぬき通した学問への姿勢と精神は、後々まで受け継つがれていったのでした。長男の谷垣守かきもり、通称丹四郎つうしやうたんしろうは、秦山学派（谷門派）として父の思いを受け継つぎ、後の世に伝えていきました。なかでも『保健大記打聞』を世に出したことは、大きな意義があります。

孫の谷真潮ましお、通称丹内たんないもまた、祖父の丹三郎重遠（秦山）、父の丹四郎垣守と共に『三丹』と呼ばれ、谷門学を引き継つぎました。宝暦十（1760）年に藩校の『教授館』が設置されると、教授役に選ばれました。谷家の学問であった谷門学を、土佐藩の教育の中心にまで高めたのは、真潮の力によるものだと言われています。真潮の考えは、武市瑞山ずいざんや坂本龍馬りやうま、中岡慎太郎なかおかしんたろうなど、明治維新に

つながる運動にも影響を与えました。

谷家の家系かけいでは、秦山―垣守―真潮―好井―景井―干城と代々受け継がれていきました。谷干城は、明治10（1877）年「西南の役」せいなんえき（*注1）で活躍後、政治家となった人物です。秦山がのこしたたくさんの記録や書き物をまとめた『秦山集』の編さん（*注2）にもあたりました。

さらに、秦山の残した「谷門学」の上に、西洋の新しい学問を取り入れて活躍した土佐の学者も多くいます。寺田虎彦（高知市・物理学）、牧野富太郎（佐川町・植物学）、山崎正光（佐川町・天文学）、上村直親（土佐山田町・医学）たちです。江戸の時代に、土佐で純粋に学び続けた一人の学者の存在と、後の時代に残したものの大きさを、あらためて感じます。

（*注1）西南の役：薩摩藩出身の政治家・軍人の西郷隆盛らによる大きな反乱。

（*注2）編さん：いろいろの原稿を集めて整理し、一つの書物にまとめること。

たくさんの弟子でにぎわった『学びの家』 秦泉寺村の家

『秦山』にちなんで、自分の名を秦山と名付け、二十一歳から十七年間暮らした家は、この山のふもとにありました。研究を続ける秦山のもとには、多くの弟子たちがかよい、秦山に教えを受け、また、秦山の研究を助けたのでした。



山田の家

結婚して長男が誕生したことから、三十八歳でこの地に家を構えた秦山のもとには、高知城下から多くの弟子がかよってきました。弟子たちは共に学び、師の研究を助けました。

四十五歳で自宅塾居の処分を受けた秦山が、亡くなるまで家族と過ごし、学問の研究に打ち込んだ場所でした。



『秦山』（一番手前の山）を東方向から見る。高知北環状線と県道16号高知・本山線との交差点の西にある小高い山です。



香美市土佐山田町秦山町の『谷秦山邸跡』。当時は、現在のような道路はなく、宅地は今より広がったと考えられています。

干城

景井

好井

真潮

垣守

秦山

谷門学を学んだ人々

山崎 正光
(1886~1959年)
天体観測家

寺田 寅彦
(1878~1935年)
地球物理学者・随筆家

中岡慎太郎
(1838~1867年)
幕末の志士

鹿持 雅澄
(1791~1858年)
国学者・歌人

牧野富太郎
(1862~1957年)
植物分類学者

上村 直親
(1884~1929年)
医学博士

武市 瑞山
(1829~1865年)
幕末の志士

坂本 龍馬
(1835~1867年)
幕末の志士

“探究”^{たんきゅう}は、

まっことおもしろいきに！

令和3（2021）年、香美市土佐山田町ぐいみ谷にある、秦山のお墓は、建てられて約三〇〇年となりました。
享保六（1721）年に、長男・垣守^{かきもり}によって建てられた小さなお墓は、「墓を立派にすることは良くない」との谷家のきまりに従って、小さな自然の川原石に「谷丹三郎^{たにたんざぶろう}重遠之墓^{しげとおの はか}」とだけ刻まれています。

宇宙と人のつながりを探究し続けたスケールの大きさを考えると、かわいらしいほどのお墓ですが、歳月^{さいげつ}の重みを感じさせてくれます。

秦山の一生は、「学問の神様」と一言では語れないほどの、山あり谷ありの苦勞の多い日々でした。でもそれは、苦勞ばかりの大変な一生だったとは思えないのです。
一期一会^{いちいちい}（*注）に恵まれ、その縁を大切にしながら、学ぶこと、調べること、知ることを何よりも喜びとした人生だったと思われてなりません。



谷丹三郎重遠之墓（谷秦山墓）

私たちの住む、この香美市を愛し、一生をかけて探究を続けた一人の学者がいたことを、皆さんも覚えてほしいと思います。

（*注）一期一会^{いちいちい}…一生に一度の出会い。

ちいさな「なぜ？」が、
大きな世界を知る第一歩。
未来に向かって、
君らしいやり方で、
物事の真実を探ってらん。



読者へのメッセージ

谷秦山は、今から300年くらい前の江戸時代に活躍した人物です。思想家、天文暦学者であり、さらに漢詩を詠み、薬草の知識も豊富な、今でいうマルチな才能を持った人でした。

秦山の思想や学問は、秦山の子や孫・子孫、弟子たちによって多くの人々に伝えられ、土佐藩の人々や高知県の先人たちを育てたといわれています。

この物語を通してまず知ってもらいたいのは、後々の時代まで秦山の思想や学問が引き継がれ伝えられていったということ。そこには、秦山が多くの人たちに慕われ、“人”としての魅力も大きかったのだと思っています。

秦山は、自身の子どもたちや弟子たちに対して、実にていねいに愛情深く接していたのではないのでしょうか。特に子どもたちに対しては、英才教育的なものも確かにあったでしょうが、子どもたちとしっかり向き合い、愛情をもって育ててきた姿勢が、代々受け継がれていったことにあると考えました。

それはまた、生まれた6人の子どもの内4人までが早世してしまう厳しい生活のなかに、しっかりとした夫婦愛が根本にあったからこそだと思うのです。今では考えられない、妻の名前が実家の姓でしか残っていない時代、たいへんな貧困の中で出産・子育てをし、夫に献身的に尽くす妻に、秦山は大きな愛情をもって接していたと思います。

『谷秦山物語』は、秦山の功績をぜひ知ってほしい思いとともに、妻や子どもに対しての秦山の“愛”が感じられるものになれば、との思いも込めました。そのため、史実だけでなく資料や文献から読み解いた創作でのイラスト・漫画も入れ、読みやすく親しみをもっていただける冊子になるように心がけました。

この冊子を入口に、さらに詳しく谷秦山について自分でも調べられて、皆さん一人ひとりの中にある“歴史の扉”を広く大きくしてもらえるように、心から願っています。

主な参考図書など

- 香美史談会谷秦山冊子編纂委員会 『学聖・谷秦山-その生涯と秦山学大成への道-』
香美史談会 2018
- 高知県市町村教育委員会連絡協議会 『高知県人物読本（中学校編上巻）土佐の巨星』
高知県市町村教育委員会連絡協議会 1979
- 秦公民館村誌編集委員会 『秦村誌』
秦公民館 1966
- 平尾道雄 『安履亭文書－野中婉の手紙－』
高知市民図書館 1973
- 大原富枝 『婉という女』
講談社 1960
- 依光貫之 『野中兼山・婉女そして土佐山田』
野中神社改築委員会・土佐山田居郁委員会 2001
- 『高知県人名事典 新版』刊行委員会 『高知県人名辞典』
高知新聞社 1999
- 土佐山田町史編纂委員会 『土佐山田町史』
土佐山田町教育委員会 1979
- 南国市史編纂委員会 『南国市史』
南国市教育委員会 1979
- 有限会社平凡社地方資料センター 『日本歴史地名大系第40巻 高知県の地名』
平凡社 1983
- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会 『角川日本地名大辞典 39 高知県』
角川書店 1986
- 岡村啓一郎 『土佐天文散歩』
高知新聞社 1995
- 高知県立高知城歴史博物館 『星を見る人～日本と土佐の近世天文歴史～』
高知県立高知城歴史博物館 2019
- 高知県立高知城歴史博物館 『土佐藩主山内家資料の世界』
高知県立高知城歴史博物館 2017
- 皇學館大學神道研究所 『神道書目叢刊七 山内文庫 谷秦山・垣守・眞潮関係書目録』
皇學館大學神道研究所 2008
- 土佐史談会 『土佐史談 第二十四号』
土佐史談会 1928
- 土佐山田町史談会 『土佐山田史談 第一〇号 谷秦山特集号』
土佐山田史談会 1988
- 香美市 「特集 学聖 谷秦山」
香美市広報 kami 165号 2020

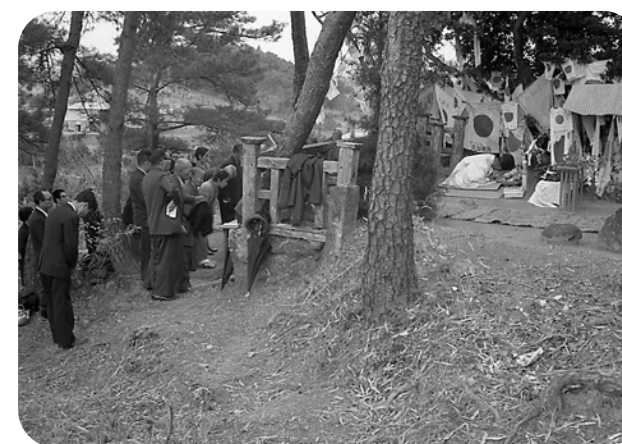
高知県秦山会

谷秦山先生は日本的学者だったと先生より聞かされ、時々先生引率で掃除に行ったことだった。学校の東側が通称「墓地山」の墓参道だった頃で、六尺幅ぐらいの直線の道を通り、山のふもとの犬道を左へ、また、北へ北へと、どぶ池のほとりより石段を登る。相当長い石段の両側は松の大木が覆いかぶさり、昼なお暗い坂だった。坂を上り詰めると広い墓所が一段と高く現在のままで、墓石も当時と変わりはなく石積みのうえに小さな自然石がそのままだった。現在の日の丸もなく竹筒に榊と野花が供えられ古い玉垣に囲まれていた。一本の山桃の木は当時とあまり変わりはないように思う。墓地より香長平野、太平洋の眺めはちらほら日光の差し込むことも無きほどの、こけむす墓所だった。

西本町寺村深が子供の頃の記憶として記した手記より

秦山会の歴史

大正7年	秦山会生まれる	会長 八井田寛婦人科院長
大正8年	正五位の恩位を谷秦山先生に追贈される	
大正9年	没後200年祭、御贈位報告祭典を執行	
大正10年	谷秦山先生墓前に青年団桜を植える（毎月掃除をする）	
昭和10年	秦山先生建碑 高知県教育委員会 八井田先生寄付による	
昭和37年	秦山会再結成 墓前祭始まる 溝渕知事会長	
昭和45年	墓前祭時、墓地山に念願の桜を植える（観光協会）	
昭和46年	お守り頒布始まる	
昭和47年	秦山墓所上屋及び玉垣復元工事	
平成22年	墓所周りの秦山公園整備完工（香美市）	
平成23年	第50回墓前祭を举行 記念事業として桜、紅梅、白梅を植樹	
平成30年	没後300年祭として墓前祭を举行（餅投げ1,600個）	
	また、それを記念して後世に引き継ぐ文献（学聖・谷秦山）を香美史談会により発刊	
令和8年2月	子供達の為の「谷秦山物語」編纂、発行	



昭和の頃の墓前祭の様子（石川祐一さんから提供）

編集後記

編さん委員 宮地 竹史

編集作業が終盤を迎えた11月、高知文教協会を通じて、伊能忠敬の地図作りを検証されている方から、「渋川春海の記録に『高知城の緯度、33度半強』とあるが、いつ誰が測ったものか？」という問い合わせがありました。

さっそく、谷秦山が元禄七（1694）年に高知城で観測したことが壬癸録に載っていること、観測方法は、近く秦山会から発行される「秦山読本」で、解説していることをお知らせしました。谷秦山については、県内でも知る人ぞ知る状態です。今回、「秦山読本」が出版されることで、若い生徒さんや学生さんに関心を持っていただけそうで、大変嬉しく思っています。

編さん委員 浦井 理恵

谷秦山先生の生き方から、大事なことを3つ教わりました。1つ目は、どんなにつらいことがあってもあきらめないこと。蟄居（家から出られない）されても本を読んだり星を見たりして、自分のできることを続けてきました。2つ目は、人のために勉強すること。3つ目は、世界や自然の本当のことを知ろうとする気持ち。これが勉強の楽しさなのかもしれないですね。秦山先生の生き方は、みんなにとってもヒントになると幸いです。

『谷秦山物語』 令和8年2月発行

■編集 谷秦山冊子編さん会議

編さん委員 高田 俊祐・宮地 竹史・松木 公宏・浦井 理恵・岡本 篤志

天文資料・天体写真画像等提供 宮地 竹史

イラスト・まんが制作 おかもとあつし

■発行者 高知県秦山会

〒782-0032 香美市土佐山田町西本町2-2-20 株式会社テラムラ内

TEL 0887-53-5151 FAX 0887-53-5153

■印刷 川北印刷株式会社

本冊子の作成にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。
（順不同、敬称略）

高知城歴史博物館、国立天文台、高知県立図書館、香美市立図書館、小野由美子、北代いづみ、岡本富美

編さん委員長 岡本 篤志

江戸時代が舞台の『谷秦山物語』、ちょっとしたタイムトラベルを体験していただけましたか？

電気もパソコンも携帯もなかった時代なのに、みんな生き生きとしているし、この時代に通信教育をやっていた人がいたとはびっくりです。そんな小さな“ワクワク”や「なぜ？」を繰り返しながら物語やイラストを仕上げていきました。専門的な内容や表現は、編さん委員さんをはじめ多くの方々に助けられ完成することができました。心より感謝申し上げます。古いものや昔のことを知ることは、今に生きる自分たちのルーツをひも解くことだと思います。みなさんにも“ふるさと香美市”のことに興味を持ってもらいたいな、と心から願っています。

編さん委員 高田 俊祐

ようやく刊行することができた。

谷秦山を語るには資料が足りずに、先輩らが残してくれた努力の結晶である書物に導かれ、おおいに参考とさせていただいたことに感謝したい。

この本「谷秦山物語」は、子供たちや若い生徒さんが秦山という人物を知る最初の本となるだろう。谷秦山という人は勉強が大好きでその範囲も詩歌からズーと天体観測まで広くて大きいゾ。君たちが成長するにつれ、もっと秦山を知りたくなれば、まだまだ秦山の本は図書館で読むこともできるよ。今、秦山先生の仕事について多くの学者、学生らが研究中だよ。そんなデカイ人物が香美市からでているんだ。ビックリだろう。本文に書ききれなかったものは参考資料として別に紹介しているから読んでください。

編さん委員 松木 公宏

谷秦山は強い体の持ち主ではありません。パソコンや電卓、いや電気すらない江戸時代に、寒い夜も蒸し暑い夏の夜でもねばり強く星の観測を続けました。時には歩いて京都や江戸にまで出かけ学びを広げています。

私は、彼が行った観測を同じやり方でやってみたいと思っています。その一方必要な情報はとても簡単に本やインターネット等で手に入れている私にできるの？どうやってやるの？無理じゃない？とも思います。でも谷秦山はそんな私に「自分で確かめることは大事でー！」「簡単にあきらめなや！」と語りかけてくれています。

年 号	西暦	谷 秦 山 の 年 表		そ の 他 の 年 表
		年齢	で き ご と	土佐・●日本・◆海外・★天文学のできごと
か えい 嘉永元	1848	没後 130 年	孝明（こうめい）天皇の即位にあたって恩赦（おんしや）があり、罪を解かれる。	●将軍は、第十二代 徳川家慶（いえよし）。 ●外国船が日本沿岸の航行が増加し、幕府が対応に苦心してなやむ。 第十三代藩主 山内豊熙（とよてる）が死去。山内豊惇（とよあつ）第十四代藩主になる。 第十四代藩主 山内豊惇が隠居（実は死去）、山内豊信（とよしげ）第十五代藩主になる。
けいおう 慶応四 めいじ 明治元	1868	没後 150 年		●江戸時代が終わり、時代は明治に移る。
明治6	1873	没後 155 年		●1月1日から、それまで使っていた『太陰太陽暦（たいいんたいようれき）（旧暦）』を廃止し、現在使われている『太陽暦（グレゴリオ暦）』を導入。
たいしょう 大正8	1919	没後 201 年	正五位（しょうごい）の位をたまわる。	●時代は、明治から大正に移る。 ●板垣退助が死去（88歳）。 ★世界中の天文学者から成る国際的組織、国際天文学連合（IAU）が発足。
へいせい 平成21	2009	没後 291 年		★世界天文年 ●時代は、大正から昭和、平成へと移る。
平成30	2018	没後 300 年	香美史談会『学聖・谷秦山ーその生涯と秦山学大成への道ー』を編さん、発行する。	
れいわ 令和3	2021	没後 303 年	5月17日 小惑星「Kamishi=香美市」誕生。 11月29日 小惑星「Tanijinzan=谷秦山」誕生。	●時代は、平成から令和に移る。
令和8	2026	没後 308 年	高知県秦山会、児童生徒向け冊子『谷秦山物語』を編さん、発行する。	

年 号	西暦	谷 秦 山 の 年 表		そ の 他 の 年 表
		年齢	で き ご と	土佐・●日本・◆海外・★天文学のできごと
じょうきょう 貞享元	1684	22	再び、浅見綱斎に師事をしようと、手紙を送るが返事はこなかった。秦山はその後も手紙を送り続ける。	●渋川春海により、国産の新しい暦（こよみ）の『貞享暦（じょうきょうれき）』が完成。 ●渋川春海が幕府天文方となる。 ●幕府が、小石川御薬園（こいしかわおやくえん）（現在の小石川植物園）を設ける。
貞享二	1685	23		●1月1日より『貞享暦』に改暦（かいいき）。
貞享三	1686	24	5月、薬を売りながら幡多（はた）地方への旅行に出発。宿毛（すくも）にて、野中兼山の遺児への面会を申し込むが許されず断念、8月に帰る。	
貞享四	1687	25		●『生類（しょうるい）あわれみの令』が出される。（公布年については諸説あり）
げんろく 元禄元	1688	26	11月1日、父 重元が65歳にて死去。	◆イギリスで『名誉革命（めいよかくめい）』が起きる。
元禄二	1689	27	浅見綱斎から手紙の返事があり入門を許される。手紙にて教えを受ける。 秋、肺結核（はいけっかく）を患（わすら）う。	
元禄三	1690	28	8月11日、母 島崎氏が死去。 秋、喀血（かっけつ）（せきとともに血をはく）。	
元禄四	1691	29	師事していた浅見綱斎と断絶する。 弟子や知人たちが、研究費用を助け合う仕組み『書籍講（しょせきこう）』をつくる。元禄十三（1700）年まで続けられる。	
元禄五	1692	30		
元禄六	1693	31		
元禄七	1694	32	2月渋川春海に書面にて入門し、神道学（しんとうがく）と天文暦学（てんもんれきがく）を学ぶ。 高知城の緯度（いど）を『北緯』33度半強であると観測して決める。	
元禄八	1695	33	8月、陰陽頭（おんみょうのつかさ）安倍泰福（やすとみ）から土曜（曜日の中で一番位が高いとされる）の印可（いんか）を授かる。 第四代佐川に深尾重方（しげかた）が家塾（後の名教館）を開き、谷秦山も講師に招かれる。 渾天儀購入。9月25日ヤコブ彗星を観測。	★ヤコブ彗星出現。
元禄九	1696	34	3月20日、火星の位置観測。 4月8日、火星・木星観測。	●松尾芭蕉（ばしょう）、『おくの細道』の旅にでる。
元禄十	1697	35	4月23日、土橋氏と結婚する。 夏に渋川春海から天文暦学の印可を授かる。	
元禄十一	1698	36	7月21日に長男 垣守（かきもり）生まれる。 10月6日、しし座流星群観測。	10月6日、高知城下に大火事が発生。 ★しし座流星群出現。
元禄十二	1699	37	1～2月に幡多郡渭南（いなん）地方に旅行。 10月4日、火球観測。 11月、伊勢神宮の荒木田経晃（あらきだ-つねてる）から中臣祓（なかとみのはらえ）の印可を授かる。	
元禄十三	1700	38	4月、秦山一家は分家して、香美郡山田村（現在の香美市土佐山田町秦山町）に引っ越す。	藩主 山内豊昌が死去、山内豊房（とよぶさ）五代藩主になる。
元禄十四	1701	39		●3月14日、赤穂藩主（あこうはんしゅ）浅野長矩（ながのり）が、江戸城内で刃傷事件（にんじょうじけん）を起こす。
元禄十五	1702	40	正月～2月の始めに彗星を観測。 2月、谷氏の祖先が、大和国三輪谷の『大神（おおみわ）姓』であることを調べ明らかにする。 3月、藩命によって高知城下に住みながら講義を行う。 11月、渋川春海から三種神器古伝、神道学の皆伝（かいでん）を授かる。 春分の日、秋分の日を定める。 次男生まれる。	●12月14日、赤穂浪士（あこうろうし）四十七士による仇討（あだうち）が行われる。

年 号	西暦	谷 秦 山 の 年 表		そ の 他 の 年 表
		年齢	で き ご と	土佐・●日本・◆海外・★天文学のできごと
元禄十六	1703	41	1月20日、惑星直列観測（木星、火星、土星、金星、水星）。 11月、藩の仕事をやめて山田村に帰る。	★1月20～24日、五星（木星、火星、土星、金星、水星）の惑星直列が起こる。 9月、兼山の男児が全員死亡したことで、生存者の罪が許される。四女・婉（えん）は、土佐郡朝倉村（あさくらむら）（現在の高知市朝倉）で暮らしはじめる。 この年土佐藩では、藩内数カ所に救い小屋を建てて、生活に困っている人を収容した。
元禄十七 ほうえい 宝永元	1704	42	2月7日、なくなっていた家宝の刀を入手。 2月12日～6月1日、渋川春海から直接学ぶために江戸へ留学。約1カ月間江戸に滞在、春海に師事する。 『東遊紀行（とうゆうきこう）』を書く。	●1～2月、浅間山が噴火する。
宝永二	1705	43	『土佐国式社考（とさのくにしきしゃこう）』執筆調査のため、明戸（あかりど）峠を越えて大川上美良布神社に行く。 三男生まれる。	●『おかげまいり』が大ブームになり、多くの人々が伊勢神宮に参拝（さんぱい）する。
宝永三	1706	44	『土佐国式社考』を書きあげる。 藩命により京都の吉田家を訪ね、『土佐国式社考』を校閲（こうえつ）してもらう。	藩主 山内豊房が死去、山内豊隆（とよたか）第六代藩主になる。
宝永四	1707	45	4月6日、無実の罪で、自宅に閉じ込められて一切の外出が許されなくなる。蟄居（ちっきょ）生活が始まる。	10月4日、大地震発生、津波押しよせる。（宝永地震） ●11～12月、富士山が大噴火（宝永の大噴火）、中腹に宝永山ができる。
宝永五	1708	46	三男が4歳にて死去。 四男生まれる。	9月22日、野中婉が香美郡山田野地（現在の香美市土佐山田町中組）に、野中兼山と一族の霊をまつるために『野中神社』を建てる。
宝永六	1709	47		●将軍 徳川綱吉が死去、徳川家宣（いえのぶ）が第六代将軍になる。 ●『生類あわれみの令』が廃止される。
宝永七	1710	48		
しょうとく 正徳元	1711	49	五男生まれるが、生後三日で亡くなる。	●浅見綱斎死去（60歳）。
正徳二	1712	50	『秦山集（じんざんしゅう）』草稿（そうこう）（下書き）完成。 長女生まれる。	●将軍 徳川家宣が死去、徳川家継（いえつぐ）が第七代将軍になる。
正徳三	1713	51	四男、6歳にて死去。	
正徳四	1714	52	蟄居生活が8年となる。漢詩「甲午除夜（きのえうましよや）」を作る。	
正徳五	1715	53	次男が14歳で死去。 渋川春海の訃報に接し、故人の安らかな眠りを祈って祭文（さいもん）を送る。五十日間の喪（も）に服す。	●渋川春海死去（77歳）。
きょうほ 享保元	1716	54	『俗説 贅弁（ぜいべん）（言わなくてもよい言葉）』出版。	●将軍 徳川家継が死去、徳川吉宗（よしむね）が第八代将軍になる。
享保二	1717	55	3月26日、脳卒中（のうそっちゅう）発作により左半身にまひが起きる。 5月『保建大記打聞（ほうけんたいきうちぎき）』の草稿ができる。	
享保三	1718	56	『俗説 贅弁続編』出版。 6月30日午後2時、再度発作を起こし急逝（きゅうせい）（急に亡くなること）する。 居宅から近い前山ぐいみ谷に埋葬（まいそう）される。	★将軍 徳川吉宗が測午表儀（そくごひょうぎ）をつくり、自ら天体観測を行う。
享保四	1719	没後1年		◆デフォー『ロビンソン・クルーソー』を出版する。
享保五	1720	没後2年	1月『保健大記打聞』出版。11月『土佐国式社考』出版。	●幕府が、キリスト教以外の洋書の輸入を解禁する。 藩主 山内豊隆が死去、山内豊常（とよつね）第七代藩主になる。
享保六	1721	没後3年	長男垣守によって、前山ぐいみ谷に墓所が建てられる。	藩主補佐役 山内（深尾）規重死去（40歳）。
明和元	1764	没後46年	妻土橋氏、86歳にて死去。	

谷 秦 山 の 年 表



年 号	西暦	谷 秦 山 の 年 表		そ の 他 の 年 表
		年齢	で き ご と	土佐・●日本・◆海外・★天文学のできごと
かんぶん 寛文三	1663	1	3月11日、神兵衛重元（じんべえしげもと）の三女三男の末っ子として、長岡郡八幡村（やはたむら）（現在の南国市岡豊八幡（おこうやはた））に生まれる。本姓は大神（おおみわ）。	●第四代将軍 徳川家綱（いえつな）、武家諸法度（ぶけしよはつと）を改定、殉死（じゆんし）を禁止。 土佐藩は第三代藩主 山内忠豊（ただとよ）の時代。 7月、野中兼山（けんざん）土佐藩家老職を解任される。12月、兼山死去。（49歳）
寛文四	1664	2		3月、兼山の妻や子どもなど22人が宿毛（すくも）へ追放、幽閉（ゆうへい）される。 山田堰（やまだぜき）が完成する。
寛文五	1665	3		
寛文六	1666	4	一家で高知城下の山田町（現在の高知市はりまや町）に引っ越す。	
寛文七	1667	5		
寛文八	1668	6		★ニュートンが反射望遠鏡の1号機を完成させる。
寛文九	1669	7		藩主 山内忠豊が隠居（いんきょ）、山内豊昌（とよまさ）第四代藩主になる。
寛文十	1670	8		
寛文 十一	1671	9	母方の祖父(島崎氏)に、『小学・四書』を学ぶ。	●山崎闇斎（あんさい）が「垂加神道（すいかしんとう）」をとなえる。
寛文 十二	1672	10	土佐郡小高坂（こだかさ）村（現在の高知市大膳町（だいぜんちょう））の常通寺（じょうつうじ）に入門。入門して2カ月で『法華経（ほけきょう）』を暗唱（あんしょう）する。	
えんぼう 延宝元	1673	11		●三井高利が江戸と京都に越後屋呉服店（えちごやこふくてん）を開く。
延宝二	1674	12	常通寺をやめて家に帰る。 父のすすめで歴史書や中国の経典などを読む。	
延宝三	1675	13		★グリニッジ天文台が創設される。
延宝四	1676	14		
延宝五	1677	15		
延宝六	1678	16		
延宝七	1679	17	4月に上京し、山崎闇斎（あんさい）の指示を受けて、浅見綱斎（けいさい）に師事する。 次いで、10月に山崎闇斎の塾生となる。	
延宝八	1680	18	4月、眼の病気を患（わすら）い帰郷。 藩から仕官（藩の役人になること）をすすめられるが断って、9月に再び上京する。 冬、渋川春海（はるみ）たちとキルヒ彗星観測を行う。	●将軍 徳川家綱が死去、徳川綱吉（つなよし）が第五代将軍になる。 ★11～12月、キルヒ彗星が出現。
てんな 天和元	1681	19	2月に帰郷する。	
天和二	1682	20	山崎闇斎の訃報（ふほう）を聞き、10月に弔（とむら）いのため上京。12月に帰郷する。 ハレー彗星を観測していない。	●9月、山崎闇斎死去（65歳）。 ★8～9月、ハレー彗星が接近。
天和三	1683	21	7月、一家で高知城の北約2 kmの秦泉寺（じんぜんじ）村に引っ越す。 9月に上京し、12月に帰郷する。	

